

令和4年度

講義要項

経営学研究科経営学専攻

博士後期課程

埼玉学園大学大学院

目 次

経営学特講（大江 清一）	1
経営組織論特講（文 智彦）	2
ヘルスケアサービス・マネジメント特講（一戸 真子）	3
地域企業論特講（反田 和成）	4
国際経営特講（伊藤 孝）	5
経営史特講（張 英莉）	6
マーケティング論特講（薄井 和夫）	7
労務管理特講（禹 宗杭）	8
財務会計特講（李 相和）	9
管理会計特講（本橋 正美）	10
国際会計特講（李 相和）	11
経営財務特講（福永 肇）	12
租税法特講（佐藤 正勝）	13
貨幣論特講（舩木 恵子）	14
金融論特講（花崎 正晴）	15
国際金融論特講（本澤 実）	16
リスク・マネジメント特講（冨家 友道）	17
特別研究指導Ⅰ（花崎 正晴）	18
特別研究指導Ⅰ（李 相和）	19
特別研究指導Ⅰ（一戸 真子）	20
特別研究指導Ⅰ（伊藤 孝）	21
特別研究指導Ⅰ（薄井 和夫）	22
特別研究指導Ⅰ（張 英莉）	23
特別研究指導Ⅰ（文 智彦）	24
特別研究指導Ⅰ（佐藤 正勝）	25
特別研究指導Ⅰ（反田 和成）	26
特別研究指導Ⅰ（福永 肇）	27
特別研究指導Ⅱ（花崎 正晴）	28
特別研究指導Ⅱ（李 相和）	29
特別研究指導Ⅱ（一戸 真子）	30
特別研究指導Ⅱ（伊藤 孝）	31
特別研究指導Ⅱ（薄井 和夫）	32
特別研究指導Ⅱ（張 英莉）	33
特別研究指導Ⅱ（文 智彦）	34
特別研究指導Ⅱ（佐藤 正勝）	35
特別研究指導Ⅱ（反田 和成）	36
特別研究指導Ⅱ（福永 肇）	37
特別研究指導Ⅲ（花崎 正晴）	38
特別研究指導Ⅲ（李 相和）	39
特別研究指導Ⅲ（一戸 真子）	40
特別研究指導Ⅲ（伊藤 孝）	41
特別研究指導Ⅲ（薄井 和夫）	42
特別研究指導Ⅲ（張 英莉）	43
特別研究指導Ⅲ（文 智彦）	44
特別研究指導Ⅲ（佐藤 正勝）	45
特別研究指導Ⅲ（反田 和成）	46
特別研究指導Ⅲ（福永 肇）	47

授業概要

経営学特講では、企業経営の根源的な問題の一つである経営倫理の問題に対して、「倫理と企業者活動」の切り口からアプローチする。本講義では明治期から昭和初期にかけて活躍した代表的な企業者として渋沢栄一を取り上げる。渋沢の事績を通して日本資本主義の発展過程における、倫理思想に裏づけられた企業者活動を考察する。

授業計画

第 1 回	ガイダンス ―講義計画― 経営倫理について
第 2 回	渋沢栄一の事績と思想
第 3 回	渋沢研究史序論 ―研究史の整理―
第 4 回	渋沢の企業者活動(1) ―渋沢の関与企業―
第 5 回	渋沢の企業者活動(2) ―企業創立への関与―
第 6 回	渋沢の企業者活動(3) ―株主總會への関与―
第 7 回	渋沢の企業者活動(4) ―社外重役・外部者としての関与―
第 8 回	企業者活動と情報(1) ―渋沢の情報活動―
第 9 回	企業者活動と情報(2) ―出資と経営―
第 10 回	企業者活動と情報(3) ―経営者層の啓蒙―
第 11 回	企業と資金活動(1) ―渋沢の資金管理―
第 12 回	企業と資金活動(2) ―渋沢の出資動向―
第 13 回	企業と資金活動(3) ―資金と信用―
第 14 回	企業と資金活動(4) ―第一銀行の経営―
第 15 回	演習のまとめ
第 16 回	定期試験

到達目標

本講義では、「企業倫理と企業者活動」に関する知識を高度なレベルで修得することを到達目標とする。これにより、いかなるテーマで博士論文を作成する場合でも、企業経営について倫理的側面から検討を加えるにあたって必要な知識と、その応用を可能ならしめる力量を蓄える。

履修上の注意

対面授業形式で行う。履修者は参考書の各章を読み込み、指定するテーマに基づいて毎回レポートを提出する。発表後、テーマに沿って議論を行う。履修者は積極的に議論に参加することが求められる。より実感をもってテーマを理解できるよう講師の実務経験を交えた講義を行う。

評価方法

毎回の講義で指定するテーマに関する課題レポートの評価を 60%加味する。期末試験は全講義を通して学んだ内容に基づいた論文作成を課し、その内容評価を 40%加味する。

テキスト

参考書：島田昌和『渋沢栄一の企業者活動の研究』（日本経済評論社、2007 年）。

授業概要

本講義では、優れた意思決定を行うための組織のあり方について講義する。

組織の存続と発展のためには優れた戦略が、優れた戦略のためには優れた戦略的意思決定プロセスが構築されなければならない。本講義では、優れた意思決定とりわけ戦略的意思決定を行うための組織のあり方について考察する。

授業計画

第1回	概要
第2回	意思決定の神話
第3回	意思決定の難しさ
第4回	戦略的意思決定とは
第5回	戦略的意思決定プロセスの諸モデル
第6回	戦略的意思決定プロセスに関する事例研究
第7回	戦略的意思決定プロセスに関する理論研究
第8回	コンティンジェンシー・アプローチ
第9回	戦略的選択アプローチ
第10回	社会的相互作用アプローチ
第11回	アクティビティ・ベースト・アプローチ
第12回	戦略的意思決定プロセスに関する実践理論
第13回	戦略的意思決定の改善のためのテクニック・スキル
第14回	意思決定プロセスの事例分析①
第15回	意思決定プロセスの事例分析②
第16回	総括

到達目標

理論について批判的視点から体系的に理解し、博士論文作成のための独創的な視点を養う。
理論に基づき事例を分析し、具体的な構想を提示する能力を構築する。

履修上の注意

事前に文献を読み理解し、授業内では積極的に議論に参加することを求める

評価方法

ディスカッション・プレゼンテーション・レポートにより評価

テキスト

指定しない

授業概要

本講義では、修士課程において習得した専門知識を更に発展させ、グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメント理論の構築について学ぶ。特に、急速に展開するヘルスケアサービスに関するグローバル化について理解を深める。どの国がどのようなヘルスケアサービス問題を抱えているか、日本はどのような点が優れているか、各国の取り組みを総合して望ましいヘルスケアサービス・マネジメントはどうあるべきかについても理解する。また、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）の動向や医療の標準化や評価の流れについても学ぶ。

授業計画

第1回	グローバルな視点からみたヘルスケアサービス・マネジメント
第2回	ベストプラクティス/パフォーマンスとマネジメント
第3回	ヘルスケア・コンシューマー・オリエンティッド
第4回	WHO、OECD、The World Bank の役割
第5回	JICA、Bill & Melinda Gates Foundation の役割
第6回	グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメント①：アメリカ
第7回	グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメント②：イギリス
第8回	グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメント③：ドイツ
第9回	グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメント④：北欧諸国
第10回	グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメント⑤：中国
第11回	グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメント⑥：その他のアジア諸国
第12回	国際認証評価 JCI、ISQua
第13回	Policy、System、Universal Standards
第14回	Quality、Safety、Efficiency、Accessibility
第15回	UHC（Universal Health Coverage）
第16回	定期試験

到達目標

- ① グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメントの基本的視点が理解できる。
- ② 各機関の役割やアプローチが理解できる。
- ③ わが国のヘルスケアサービス・マネジメントの現状を客観的に分析できる。
- ④ ユニバーサル・ヘルスカバレッジ（UHC）について理解を深める。
- ⑤ 国際認証評価や医療の標準化で重要とされている視点について説明できる。

履修上の注意

グローバルな視点で医療について考える習慣をつけて欲しい。
欧米の文献を使用するので、英語力も身につけることを求める。

評価方法

レポートおよび発表 40%、試験 60%

テキスト

教科書は特に指定しない。必要に応じて適宜資料を配布する。

授業概要

本講義では、世界的な競争の中で海外企業との競争激化に直面している地域企業、地域中小企業の課題、問題点を事例研究を通じて学ぶと共に、自ら地域企業、地域中小企業の課題、問題点を抽出し、解決策を提案することを目的としている。

また、受講生の研究テーマに関わる地域企業、地域中小企業を取り上げ、その実態を講義することで、研究内容を深めることに努める。

授業計画

第1回	オリエンテーション
第2回	受講生の研究テーマと本講義について
第3回	地域企業と地域企業の海外進出戦略
第4回	地域企業と地域企業の海外進出戦略
第5回	各自レポートの発表と討議
第6回	地域ブランドと産業振興
第7回	地域ブランドと産業振興
第8回	各自レポートの発表と討議
第9回	地域企業と中小企業の課題と発展可能性
第10回	地域企業と中小企業の課題と発展可能性
第11回	各自レポートの発表と討議
第12回	受講生の関心のある企業の実体と諸問題に関して (1)
第13回	受講生の関心のある企業の実体と諸問題に関して (2)
第14回	受講生の関心のある企業の実体と諸問題に関して (3)
第15回	受講生の関心のある企業の実体と諸問題に関して (4)
第16回	定期試験

到達目標

- ・地域企業と地域中小企業を学ぶことで、国内外の経済社会の変化と今後を展望できる能力と問題解決能力を身に付けることができる。また、論文作成の基本的な論点整理に繋がる分析力を備えることを目標とします。

履修上の注意

- ・単に講義で学ぶという姿勢に終わることなく、自らの研究課題を踏まえ、積極的に議論することを求めます。また、取り上げる新聞記事、雑誌記事、参考文献などを単に読むだけでなく、それに対しての意見を持ち議論できるよう準備すること。

予習・復習

- ・予習、復習をきちんと行い、毎回出席すること。

評価方法

- ・課題提出（50%）、定期試験（50%）で総合評価します。

テキスト

- ・テキストは使用せず、適宜講義資料、新聞記事、雑誌記事などを配布します。

授業概要

本講義は、国際企業経営、世界企業の行動の特質、などの解明を目的とし、そのための 1 つの手立てとして、世界石油産業界の主導的な大企業群（国際石油企業）の活動を講義します。19 世紀中葉のアメリカにおいて発祥した近代石油産業は、19 世紀の末までに海外に多数の子会社を持つ世界企業を登場させました。最大企業ニュージャージー・スタンダード石油会社（現エクソンモービル社）の企業史は、世界企業とは何か、企業の活動の国際化とは何かを我々に知らしめる好個の検討素材を提供しています。本講義は、21 世紀の今日までを射程に入れて、国際石油企業の活動を考察し、国際企業経営についての深い理解の獲得を目指します。

授業計画

第 1 回	はじめに
第 2 回	現代経済と石油産業
第 3 回	世界石油産業の発展と国際石油企業
第 4 回	19 世紀後半・末におけるスタンダード石油会社による世界市場支配
第 5 回	両大戦間期における世界石油産業の再編成
第 6 回	第 2 次大戦後の中東地域での国際石油企業による油田支配
第 7 回	1970 年代における中東地域での油田支配体制の変貌
第 8 回	国際石油企業による原油生産体制の再構築－1970 年代
第 9 回	国際石油企業による原油生産体制の新展開－1980 年代、90 年代
第 10 回	国際石油企業による原油生産体制の現段階－21 世紀初頭以降
第 11 回	国際石油企業による製品販売体制の再編成－1970 年代以降
第 12 回	国際石油企業による事業の多角化戦略の追求－1970 年代以降
第 13 回	国際石油企業の経営組織の再構築－エクソンモービル社を対象に
第 14 回	国際石油企業の現段階
第 15 回	総括
第 16 回	課題レポートの提出と発表

到達目標

国際石油企業の活動を追跡し、世界企業とは何か、国際企業経営とは何かについての深い理解の獲得を目指します。

履修上の注意

- (1) レジюмеや資料（統計、図表など）を配布し、これに沿って解説します。但し、以下の論文等を用いるときは、出席者に報告を求めます。
- (2) 病気などの場合を除いて、毎回欠かさず出席してください。

評価方法

レポートの提出、討論への参加をそれぞれ 50% で評価します。

テキスト

現時点ではテキストを予定していませんが、参加者と話し合いの上、演習方式を取り入れる場合は、以下の小論などを配布します。

伊藤孝「1970 年代におけるエクソン社の原油獲得活動」、『社会科学論集』、埼玉大学、第 138 号、2013 年、

伊藤 孝「エクソンモービル社の史的展開－1970 年代初頭から 21 世紀の最初の数年間まで－」、『社会科学論集』、埼玉大学、第 149・150 合併号、2017 年、

参考文献：

伊藤 孝『ニュージャージー・スタンダード石油会社の史的研究－1920 年代初頭から 60 年代末まで』、北海道大学図書刊行会、2004 年、

授業概要

本講義では、いわゆる「日本的経営」の形成、変遷の過程を丹念に考察し、「日本的経営」の特質を考究する。戦後の日本企業は当時のアメリカ経営の姿を「普遍的で一般にあるべき姿」として捉え、経営者の多くはアメリカの経営から貪欲に学び、その経営モデルに接近しようとした。しかし、その過程に日本で出来上がった経営方式はアメリカの模倣ではなく、またその他の国とも異なった極めて「日本的」な特徴をそなえたものであった。本講義では「日本的経営」のこれまでの研究を概観したうえで、戦後日本企業における「集団主義」、「集団的行動」をメインテーマとして取り上げる。また「日本的経営」との関連で、アジア、特に中国の企業経営史の特徴と問題点について、「日本的経営」との比較を念頭に併せて講義する。

授業計画

第1回	ガイダンス（授業方法、授業計画、到達目標、評価方法、基本文献の紹介など）
第2回	「日本的経営」とは何かⅠ 「日本的経営」の源流
第3回	「日本的経営」とは何かⅡ ジェームズ・アベグレン『日本の経営』における論点：「三種の神器」説の影響と限界
第4回	「日本的経営」とは何かⅢ 研究の系譜と論点の整理
第5回	「日本的経営」と伊丹敬之の「人本主義」
第6回	「日本的経営」と加護野忠男の「愚直の経営」
第7回	日本企業のアメリカ経営手法への接近と揚棄Ⅰ アメリカ的経営管理方式の導入過程
第8回	日本企業のアメリカ経営手法への接近と揚棄Ⅱ アメリカ的経営手法の吸収と改良
第9回	日本の経営組織と日本的集団行動の特質Ⅰ
第10回	日本の経営組織と日本的集団行動の特質Ⅱ
第11回	JIT と集団主義的経営——価値の共有とモチベーション
第12回	中国国有企業の組織と個人の関係Ⅰ 改革開放前後の変化
第13回	中国国有企業の組織と個人の関係Ⅱ 日・米・中の比較
第14回	「日本的経営」の海外移転
第15回	「日本的経営」と企業経営のグローバル化
第16回	期末試験

到達目標

本講義を通じて、修士課程で習得した知識をもとに、戦後復興期から高度成長期までの日本の経済・経営発展の全般をより広く深く理解し、グローバル経営の観点から「日本的経営」を認識し、独創性豊かな自立した研究者に必要な素養を身につけることが最終目標である。

履修上の注意

指定された文献を通読し、与えられた課題をやり抜き、自分の考えや意見を積極的に述べることが要求される。

評価方法

課題への取り組み 60%、学期末試験 40%の配分割合で評価する。

テキスト

テキストならびに参考文献は授業中に適宜指示する。

授業概要

これまでのマーケティング論の射程を超え、マーケティングの歴史研究や、消費文化理論（Consumer Culture Theory, CCT）、言語学の語用論における関連性理論、状況的認知論、状況的学習論、実践としての戦略研究や実践としてのマーケティング研究など、マーケティング研究でなお十分に着目されていない関連諸分野の知識を動員し、マーケティングの現場を分析する新たな理論視角を構築するための素材を選択し、その内容を理解できるように指導する。

授業計画

第1回	ガイダンス
第2回	マーケティング歴史研究の現在（1）
第3回	マーケティング歴史研究の現在（2）
第4回	マーケティングの新分野としての消費文化理論（1）
第5回	マーケティングの新分野としての消費文化理論（2）
第6回	マーケティングの新分野としての消費文化理論（3）
第7回	マーケティングの新分野としての消費文化理論（4）
第8回	マーケティング・コミュニケーションと関連性理論（1）
第9回	マーケティング・コミュニケーションと関連性理論（2）
第10回	消費者行動研究と状況的認知論（1）
第11回	消費者行動研究と状況的認知論（2）
第12回	消費者行動研究と状況的認知論（3）
第13回	消費者行動研究と状況的認知論（4）
第14回	マーケティングの非公式組織としての実践コミュニティ（1）
第15回	マーケティングの非公式組織としての実践コミュニティ（2）

到達目標

マーケティングの新しい研究動向を理解すること。関連諸分野における新たな理論展開を理解し、マーケティングの新しい理論的分析視角へとつなげること。

履修上の注意

新たな研究動向を把握するために、英文の文献検索は必須である。各自 e-journal で新しい文献を検索できるようにすることが必須である。
なお、遅刻、無断欠席は厳禁のこと。

評価方法

授業態度20%、授業への貢献（発言等）30%、期末レポート50%によって評価する。

テキスト

＜参考文献＞

薄井和夫「マーケティング史研究におけるマーケティング概念の多義性について」拓殖大学『経営経理研究』第106号、2016年、169～207ページ。

Kazuo Usui, *The Development of Marketing Management: The Case of the USA c.1910-1940*, Aldershot, UK: Ashgate, 2008.

Kazuo Usui, *Marketing and Consumption in Modern Japan*, Abington, UK: Routledge, 2014.

授業概要

本講義では、労務管理のコアをなす報酬に焦点を合わせ、これから求められる報酬を、参加者とともに設計する。従来、報酬論は、日本は特殊だとする前提のうえで築き上げられてきた向きがある。たとえば、賃金の決め方については、世界のほとんどの国が職務基準賃金なのに、日本は属人基準賃金だとする主張が強まってきた。一方、賃金の上がり方については、ブルーカラーにまで適用される、日本の査定つき定期昇給は、労働者の知的熟練形成を促す点で、世界でも先進的だとする言説が広く受け入れられてきた。本講義では、(1) 報酬の現状、(2) 世界の報酬制度、(3) 日本における報酬の歴史的な変化をふまえ、従来の議論を相対化したうえで、(4) 今後求められる報酬をデザインする。

授業計画

第1回	「賃金の決め方」の検討
第2回	「賃金の上がり方」の検討
第3回	報酬の現状：水準および制度
第4回	アメリカの報酬
第5回	ヨーロッパの報酬
第6回	アジアの報酬
第7回	日本における変化（その一）：年功給から能力給へ
第8回	日本における変化（その二）：能力給から役割給へ
第9回	報酬を規定するもの（その一）：市場
第10回	報酬を規定するもの（その二）：組織
第11回	報酬の要素（その一）：能力
第12回	報酬の要素（その二）：インセンティブ
第13回	報酬の要素（その三）：生活
第14回	求められる報酬のデザイン（その一）：アイデンティティの追求
第15回	求められる報酬のデザイン（その二）：向上への働きかけ
第16回	期末試験

到達目標

- ①報酬の現状を把握する。
- ②報酬とかわる理論的課題について理解を深める。
- ③新たな報酬制度を自らデザインする。

履修上の注意

本講義では、報酬に重点をおくものの、インセンティブなど応用範囲の広い概念を取り扱い、参加者とともに制度のデザインを試みることで、参加者自身の研究にも役立てることをめざす。自らオモシロイ授業を作りたいと思う人の参加を期待する。

評価方法

授業への通常の参加とディスカッション、研究報告、課題提出などに基づき、総合的に評価する。

テキスト

特に使用しない。参考としては、禹宗杭「アジアの賃金—『学歴別・熟練度別賃金』—」社会政策学会第135回大会報告、2017年のほか、関連する文献や資料を授業中適宜提示する。

授業概要

資本市場のグローバル化により、財務会計制度は急速に変えつつある。特に、グローバル化時代の会計基準は、国際会計基準（IFRS）のように、公正価値評価による会計情報を重視するなど会計観の変化をもたらしている。この授業では、博士前期課程で修得した会計諸基準の知識を踏まえて、博士論文の作成に必要な水準に理論を深化させるとともに、現実問題の実証あるいは実態分析などに必要な技法を習得させることを目標とする。具体的には、「金融商品」、「公正価値測定」、「収益認識」などの特徴分析において、資産負債アプローチに基づく会計基準の計算構造とその基礎をなす概念フレームワークを体系的に講義する。

授業計画

第 1 回	受講生の問題意識の確認、財務会計の概要
第 2 回	財務会計の存在意義と会計研究の方向性
第 3 回	財務会計における「理論的研究と実態あるいは実証分析」の意義
第 4 回	財務会計制度の理論的形成の分析
第 5 回	財務会計の法的規制と会計基準の体系
第 6 回	財務会計概念フレームワークの意義と特徴分析
第 7 回	公正価値測定の意義とその特徴分析
第 8 回	損益認識と資産・負債評価の関連性
第 9 回	収益費用アプローチと資産負債アプローチの意義と特徴
第 10 回	利益概念の変化 ―純利益と包括利益の特徴分析―
第 11 回	収益認識の理論的検討―実現稼得モデルと顧客契約モデル
第 12 回	負債と資本の概念的分析
第 13 回	条件付持分請求権（新株予約権など）の会計
第 14 回	金融商品会計の理論的分析
第 15 回	デリバティブの会計処理
第 16 回	定期試験

到達目標

- ・博士論文の作成に必要な会計理論と制度分析に関する知識の習得
- ・グローバル化に伴う会計問題についての分析力の向上
- ・会計制度の国際的動向や会計情報の分析能力の習得

履修上の注意

- ・授業の進め方は講義形式と受講生による発表を中心とする。
- ・自己の論文テーマに関する予習復習に務めること。
- ・授業での積極的な貢献が求められる。

予習・復習

授業の理解度を高めるために、レポートなどを通して講義内容に合わせて国際会計の関連用語を熟知させる。

評価方法

期末試験またはレポート報告 60%、授業での積極性（報告の内容及び質疑応答など） 40%

テキスト

- ・開講時に指示する。
- ・必要に応じて関連資料を配布する。

授業概要

この授業では、大きく分けて管理会計に関する3つのテーマについて取り上げ講義を行う。1つ目のテーマは管理会計情報の特質と目標管理についてである。2つ目のテーマはマーケティング管理会計であり、そして、3つ目のテーマは中小企業管理会計である。これらのテーマは、本橋がこの10年ほどの間に取り組んできた研究テーマであり、ほぼ毎年、学会発表を行うと共に論文を公表し、管理会計の分野では、最近、特に重要になってきている問題である。

授業計画

第1回	管理会計情報の質的特性
第2回	目標管理のための管理会計
第3回	マーケティング活動の有効性評価：マーケティング・メトリックスと管理会計
第4回	マーケティング・メトリックスに関する諸説の検討：マーケティング活動の業績管理
第5回	マーケティング活動の多次元情報分析
第6回	顧客クレーム管理と企業業績
第7回	マーケティング活動の効果測定
第8回	顧客中心主義に基づく顧客の業績測定
第9回	中小企業管理会計の特質と課題
第10回	中小企業管理会計の事例研究アプローチ
第11回	中小企業の発展段階と管理会計システム
第12回	中小企業の業績管理システム：株式会社エコムの事例
第13回	中小企業管理会計システムの類型
第14回	中小企業管理会計の発展段階モデル
第15回	3つのテーマに関する討論
第16回	課題

到達目標

博士論文の作成に必要な管理会計の基礎知識と応用問題についての考え方を学ぶことである。

履修上の注意

授業では、テーマを決めて2回程度報告することが求められる。

予習・復習

授業中に配付するレジュメやプリントの該当箇所について必ず予習・復習を行うこと。

評価方法

授業における質疑への参加の程度、報告、課題レポートなどで総合的に評価する。

テキスト

テキストは使わず、本橋が執筆した論文を使用する。

授業概要

この授業の目的は修士課程での国際会計特論の講義の水準を発展・進化させることを踏まえて、論文作成に必要な国際会計論の理論を学ぶことである。IFRS 適用には資産と負債における公正価値の評価範囲の拡大と包括利益の表示による利益概念の変化に対処することが要求される。特に、IFRS 適用企業を中心に財務諸表の事例分析を通して、IFRS と日本基準との理論的関連性を分析するとともに、IFRS 適用のあり方や日本の企業会計の国際的に対応するための手法を講義する。

授業計画

第 1 回	国際会計基準（IFRS）の意義とその特徴
第 2 回	会計国際化の変遷と IFRS 適用の状況
第 3 回	日本基準の固有性と IFRS との関連性分析(1)
第 4 回	日本基準の固有性と IFRS との関連性分析(2)
第 5 回	公正価値会計の特徴と論点整理
第 6 回	公正価値会計の適用上の個別論点
第 7 回	公正価値評価とその影響分析の争点
第 8 回	会計観の相違と利益概念の変化との関連性
第 9 回	包括利益の概念と論点整理
第 10 回	包括利益の導入と業績報告
第 11 回	IFRS 適用企業の実態分析とその検討(1)
第 12 回	IFRS 適用企業の実態分析とその検討(2)
第 13 回	IFRS 適用企業の実態分析とその検討(3)
第 14 回	IFRS 適用企業の実態分析とその検討(4)
第 15 回	日本における IFRS 適用の課題とその可能性の検討
第 16 回	定期試験

到達目標

- ・博士論文の作成に必要な会計理論と制度分析に関する知識の習得
- ・グローバル化に伴う国際会計問題についての分析力の向上
- ・会計制度の国際的動向や会計情報の分析能力の習得

履修上の注意

- ・授業の進め方は講義形式と受講生による発表を中心とする。
- ・自己の論文テーマに関する予習復習に務めること。
- ・授業での積極的な貢献が求められる。

予習・復習

授業の理解度を高めるために、レポートなどを通して講義内容に合わせて国際会計の関連用語を熟知させる。

評価方法

期末試験またはレポート報告 60%、授業での積極性（報告の内容及び質疑応答など）40%

テキスト

- ・開講時に指示する。
- ・必要に応じて関連資料を配布する。

授業概要

本講義では、企業経営における財務の考え方や理論的な枠組み、金融実務を理解する。主に、講義内では、「資金調達」における考え方、調達方法、リスク等の留意点に注力して講義する。

授業計画

第1回	ガイダンス。資金調達・管理の重要性
第2回	資金調達の形態
第3回	資金調達における7つの検討項目（調達可能金額、調達条件、オールインコスト、難易度と必要時間、経営権への影響、調達の継続性/安定性、ALM）
第4回	資金調達の区分（短期/長期、間接金融/直接金融、自己資本/他人資本）
第5回	貸借対照表とファイナンス（デット、エクイティ、アセット、簿外）
第6回	借入金利/利息の計算方法（単利/複利、割引、先取/後取、360/365日ベース）/利息支払日
第7回	短期資金調達①（資金繰り管理と黒字倒産、運転資金・賞与資金・決算資金）
第8回	短期資金調達②（調達のタイミング）
第9回	短期資金調達③（銀行借入）
第10回	長期資金調達①（株式発行による資金調達①）
第11回	長期資金調達②（株式発行による資金調達②）
第12回	長期資金調達③（債券発行による資金調達。債券の利回り/価格、格付け）
第13回	配当政策①（配当のタイプ：現金配当、自己株取得、株式分割）
第14回	配当政策②（配当と企業価値、資本コスト）
第15回	資本構成の理論（財務レバレッジ、MM定理）
第16回	課題レポートの提出と発表

到達目標

- ① 「資金調達」の手法、実務、基本的な考え方、理論について理解する。
- ② 各種の資金調達における調達条件、リスク等を客観的に正確に理解する。

履修上の注意

本講義は講義形式で行う。復習をしっかりと行うこと。
財務諸表（貸借対照表、損益計算書、キャッシュフロー計算書）の仕組みを理解していることを受講条件とする。

予習・復習

講義では履修者が初めて聞く用語や考え方が多いと推される（金融の世界は一般人には不案内な事項が多い）。受講の後、復習を行い不明点、照会事項があれば積極的に質問してほしい。

評価方法

レポート 70%、授業への積極的な参加 30%で評価する。

テキスト

テキスト、参考文献は講義の中で適宜紹介、資料配布する。

授業概要

本講義が対象とする領域は、租税法の解釈の分野であり、立法政策論の分野には、深入りしない。本講義が養成する能力は、租税法解釈に関する種々の専門的能力である。

ただし、租税法特論とは異なり、より専門的、より実践的、より高度な内容とする。したがって、なるべく、実例の論文等を適宜教材として使い、履修生からも履修生自身の博士論文を必要に応じて、教材として提供してもらう。したがって、教員のみが話し続けるというよりは、双方向での議論を通じて理解を深めていくような授業としたい。つまり、そのための準備をして履修生も授業に望むことになる。

授業計画

第1回	基礎概念：立法論・解釈論・事実認定・法適用と事例研究
第2回	法的思考：法的三段論法の事例研究
第3回	法的思考：事実・基準・効果の事例研究
第4回	法の解釈原理：事例研究
第5回	法解釈上の問題：問題の発見方法と事例研究
第6回	法解釈上の問題：問題点・議論点の意義・相違と事例研究
第7回	あるべき解釈探求の方法論：概説の事例研究
第8回	最も妥当な思想・学説決定の方法論：序説と事例研究
第9回	最も妥当な思想・学説決定の方法論：詳説と事例研究
第10回	具体的解釈基準探求の方法論：司法の法解釈からのアプローチの事例研究
第11回	具体的解釈基準探求の方法論：要件事実からのアプローチの事例研究
第12回	論理的思考の養成その1：本質へのアプローチの事例研究
第13回	論理的思考の養成その2：分析的アプローチと事例研究
第14回	論理的思考の養成その3：対立点の昇華の方法と事例研究
第15回	まとめ
第16回	期末試験

到達目標

本講義が実現したい目標は、租税法の専門家として税法解釈上の正しい判断ができる能力・資質の向上に加え、租税法特論で学んだ内容を踏まえ、それに上乗せできる実践的な能力の向上を目指す授業とする。すなわち、論理的思考、分析的思考をフルに発揮して、論文作成能力及び実務での税務専門家としての能力のさらなる向上を目指す。

履修上の注意

学部において、租税法の講義を履修していること、学部で、租税法の卒業論文を書いていることにより、前期課程で、租税法特論を修了していることが好ましい。なお、租税法の博士論文を書く履修生がいる場合は、論文内容を発表してもらうなど、事例的に具体的に、実践を意識した授業にしたい。したがって、常に、授業内容について、自分なりの理解と疑問（及び意見）を持って臨んでもらいたい。

予習・復習

テキストや論文の事例を配布する予定である。これらのテキスト等の予習復習は、常に、実践を意識した[理解・訓練・実行]型の予習・復習としてもらいたい。

評価方法

「期末試験」(50%)、「チェック・テスト、レポート」(40%)、「授業での態度（理解力の程度・意見陳述力等の巧拙等の内容）」(10%)で評価する。

テキスト

必要に応じて、教員が作成したテキストを配布する。可能なら、論文の実例などを参照しながら進めると効果的なので、必要に応じて配布することがある。なお、参考書は、金子宏著「租税法（第23版）」（弘文堂、2019年）又はその最新版とする。

授業概要

本講義では、博士前期課程での講義を深化・発展させ、博士論文の水準に必要な高度な知識の習得を目指す。現実の通貨危機の課題、特にアジア通貨危機とリーマン・ショック後のドル体制の不安定化の問題を踏まえて、基軸通貨のあり方と通貨量の管理の問題を講義する。また授業中、受講学生の研究テーマに対応した研究論文について適宜取り上げ博士論文の内容に沿った講義をおこなう予定である。

授業計画

第1回	講義に関するガイダンス
第2回	貨幣の価値
第3回	貨幣と社会
第4回	貨幣としての金
第5回	富としての貨幣
第6回	信用貨幣
第7回	政府紙幣
第8回	電子マネー
第9回	貨幣数量説の形成
第10回	貨幣数量説を理解する
第11回	貨幣数量説批判政策としての貨幣数量説
第12回	貨幣管理の諸問題
第13回	国際基軸通貨とシニョレッジの問題点
第14回	国際決済通貨としてのSDR、バンコールを考える
第15回	地域単一通貨ユーロの形成と問題点
第16回	確認試験

到達目標

本講義では通貨問題を中心に、博士前期における研究を深化させ博士論文作成のための高度な思考と分析力を養い、独創性ある視点から問題を解決する能力を育成することを目標とする。

履修上の注意

受講生の研究状況によっては適宜、個別に課題を指定する場合がある。

予習・復習

授業中に扱う論文や原典については十分な予習をおこなうことを前提とする。

評価方法

授業および課題への取り組みとディスカッション・ペーパー、レポート、確認試験等によって評価する。

テキスト

授業中に適宜関連文献を紹介する。

授業概要

この授業では、企業金融とコーポレート・ガバナンスに関連した諸問題を勉強します。モジリアーニ・ミラー理論を出発点として、情報の非対称性や各種の制度的制約が存在する場合に、企業の投資の決定と投資に必要な資金の調達に関する問題はどのように決定されるのかを理論的に考察します。また、企業金融と表裏一体の関係にあるコーポレート・ガバナンスの問題に着目し、コーポレート・ガバナンスの多様なメカニズムを理解したうえで、日本のシステム、英米のシステムそして東アジア的システムを取り扱った各種の文献を解説します。

授業計画

第1回	オリエンテーション：この授業で学ぶこと
第2回	モジリアーニ・ミラー理論
第3回	最適資本構成の理論
第4回	情報の非対称性とモラル・ハザード
第5回	負債政策とペッキング・オーダー理論
第6回	エージェンシー理論
第7回	株主による経営者のモニタリング
第8回	経営者へのインセンティブ付与
第9回	企業コントロール市場の機能
第10回	系列とメインバンク・システム
第11回	ファミリー・ビジネス
第12回	CSRとESG
第13回	銀行のガバナンス問題
第14回	法律とファイナンス
第15回	企業金融とコーポレート・ガバナンスの将来展望
第16回	期末レポートの提出

到達目標

企業金融およびコーポレート・ガバナンスの分野で代表的な理論および実証の先行研究を読みこなし、オリジナルな分析ができるようになることを目指します。

履修上の注意

この授業は、基本的には講義形式で進めますが、受講生による報告の機会も設ける予定です。

予習・復習

各回の講義で予定されている文献を事前に読んで理解するとともに、各回の授業終了後に内容を復習することを求めます。

評価方法

授業への取り組み姿勢(25%)、報告内容(25%)および期末レポート(50%)に基づき、総合的に評価します。

テキスト

授業で取り上げる文献等を、その都度授業で紹介します。

授業概要

本講義では、修士課程における研究を深化・発展させ、国際金融論に関する高度な学術研究能力の習得を目標とし、博士論文作成に必要な水準の理論・歴史及び制度を講義する。1980年代のアメリカの商業銀行・S&Lの不良債権問題の実態を分析し、不良債権処理と国際金融危機との関係、具体的には中南米の累積債務問題とアメリカ共和党政権の対応とその成果を講義する。この分析を踏まえ、サブプライム危機による不良債権問題とリーマン・ショックによる国際金融危機の深化とその対策を講義する。

なお、講義中、受講生の研究課題に即して適宜必要な学術論文を取り上げる。

授業計画

第1回	国際通貨・金融に関する理論（1）—国際通貨論と基軸通貨体制の揺らぎ
第2回	国際通貨・金融に関する理論（2）—為替理論、国際収支理論
第3回	変容する国際金融—ドル危機とブレトンウッズ体制の崩壊の教訓
第4回	国際金融市場の変容—為替相場とグローバル・インバラン
第5回	世界金融危機の契機となった不良債権問題
第6回	国際金融危機の原点としての1980年代の中南米債務問題
第7回	中南米累積債務問題と債権の証券化—ブレディプランの有効性の検討
第8回	グローバル・インバランスとサブプライムローンの証券化の破綻問題
第9回	アメリカの資産の証券化の失敗と金融規制—ドット・フランク法の成立
第10回	金融市場の不安定化の常態化問題
第11回	欧州の国債危機と金融危機
第12回	欧州の金融機関の不安定化問題とバーゼル合意
第13回	世界的金融危機と各国の金融規制
第14回	金融グローバリゼーションの問題点と金融市場の不確実性への対策
第15回	国際金融の新たな潮流—仮想通貨について
第16回	定期試験

到達目標

本講義では、修士課程における研究を深化・発展させ、国際金融市場が抱える今日的課題に鑑み、博士論文の作成に必要な国際金融に関する高度な理論と分析力を習得し、独創性のある視点から問題を解決する能力を育成することを目標とする。

履修上の注意

授業中に取り扱う研究論文と原典について十分な予習と行うこと。また、本講義を併せて、金融論特講、貨幣論特講を受講することが望ましい。授業中、受講生の研究状況に応じて課題を指定するので積極的に取り組むこと。

評価方法

- ① 授業中の発言内容など平常点
- ② 課題に対するレポートの評価点

テキスト

授業中に指示する

参考文献：本澤実『国際金融システムの再構築』（御茶の水書房）

授業概要

リスクマネジメント特論で議論されるレベルの基本的なリスクマネジメントの理解のもとで設例に基づき具体的なリスクマネジメント計画のケーススタディーを実践し経営者として必要なリスク感覚と知見を養成する。専門性の高い博士課程であることを考慮し、設例については学生の研究テーマや問題意識を考慮し、学生との議論によって決定する。

授業計画

第1回	オリエンテーション
第2回	リスクマネジメントの基礎知識復習1
第3回	リスクマネジメントの基礎知識復習2
第4回	設例の設定1
第5回	ケーススタディー1
第6回	ケーススタディー1 続き
第7回	ケーススタディー1 続き
第8回	ケーススタディー1 評価
第9回	設例の設定2
第10回	ケーススタディー2
第11回	ケーススタディー2 続き
第12回	ケーススタディー2 続き
第13回	ケーススタディー2 評価
第14回	学生からのプレゼン
第15回	総括
第16回	予備

到達目標

リスクマネジメントの基礎知識をケースに具体的に適用することでリスクマネジメント実際、特に経営戦略との関係をトレードオフなどの理解を深める。

履修上の注意

リスクマネジメントの基礎知識を想定しているが、講義の最初で復習することで十分獲得できるレベルを予想している。博士課程の講義であることから、ケーススタディーの実施などでの学生の主体的な参加を強く求める。

予習・復習

毎回講義で議論されたことをベースに、次回のケースに向けた準備が必須。

評価方法

毎回の講義での学生の発表、およびレポートで評価。

テキスト

授業中に指示する

授業概要

私の専門分野は、金融システム、コーポレート・ファイナンス、コーポレート・ガバナンス、ESGなどの理論および実証研究であり、それらの分野における論文作成に必要とされる専門的な知識および実証分析手法を修得します。また、博士1年次の最後には博士論文執筆に向けての計画書を作成します。

授業計画

＜春期＞		＜秋期＞	
第1回	ガイダンス：研究指導の概要	第1回	金融システムに関する先行研究の読解
第2回	先行研究の収集	第2回	同上
第3回	コーポレート・ファイナンスに関する先行研究の読解	第3回	同上
第4回	同上	第4回	同上
第5回	同上	第5回	ESGに関する先行研究の読解
第6回	同上	第6回	同上
第7回	同上	第7回	同上
第8回	同上	第8回	同上
第9回	コーポレート・ガバナンスに関する先行研究の読解	第9回	実証分析手法の修得
第10回	同上	第10回	同上
第11回	同上	第11回	同上
第12回	同上	第12回	同上
第13回	同上	第13回	研究計画書の検討
第14回	同上	第14回	同上
第15回	同上	第15回	同上

到達目標

博士論文執筆に向けて、先行研究を十分に理解するとともに、自身の論文の問題意識を深めていきます。

履修上の注意

最終的に博士論文を完成させるというのは、膨大な時間と心身両面でのかなりの労力を要しますので、十分な覚悟を持って取り組んでください。

評価方法

各回の報告と進捗状況に基づいて、総合的に評価します。

テキスト

必要な文献は、適宜指示します。

授業概要

博士論文を完成させるための準備を進める。特に次のような指導する。

- 1 論文テーマの設定（基本的には本人の研究計画書による）の明確化。
- 2 テーマの問題設定のための既存研究のサーベイと論点整理。
- 3 論点ごとの研究報告。

授業計画

＜春期＞		＜秋期＞	
第1回	受講生の問題意識の把握	第1回	博士論文の構成の作成(1)
第2回	テーマ関連の文献リストの作成	第2回	博士論文の構成の作成(2)
第3回	基本的な文献の調査と報告(1)	第3回	博士論文の構成の作成(3)
第4回	基本的な文献の調査と報告(2)	第4回	論文構成に必要な文献研究のレビュー(1)
第5回	基本的な文献の調査と報告(3)	第5回	論文構成に必要な文献研究のレビュー(2)
第6回	基本的な文献の調査と報告(4)	第6回	論文構成に必要な文献研究のレビュー(3)
第7回	基本的な文献の調査と報告(5)	第7回	論文構成に必要な文献研究のレビュー(4)
第8回	論文テーマの絞り込み	第8回	論文構成に必要な文献研究のレビュー(5)
第9回	テーマ関連の報告と検討(1)	第9回	研究の中間的なとりまとめ(1)
第10回	テーマ関連の報告と検討(2)	第10回	研究の中間的なとりまとめ(2)
第11回	テーマ関連の報告と検討(3)	第11回	研究の中間的なとりまとめ(3)
第12回	テーマ関連の報告と検討(4)	第12回	研究の中間的なとりまとめ(4)
第13回	テーマ関連の報告と検討(5)	第13回	研究の中間的なとりまとめ(5)
第14回	テーマ関連の報告と検討(6)	第14回	研究の中間的なとりまとめ(6)
第15回	研究成果の報告	第15回	研究成果の報告・討論

到達目標

論文作成に関連する先行研究を熟知し、必要な文献を整理する。
博士論文テーマの中間的なとりまとめを行う。

履修上の注意

自ら課題に対して問題内容の明確化に努め、研究文献に対する批判力を養うこと。
自ら積極的に課題を設定し調査研究を行うこと。

評価方法

レポート報告（60%）、講義中の議論（40%）によって総合的に判定する。

テキスト

学生の研究テーマに応じて指示する。

授業概要

急速に変化、発展するヘルスケアサービスを取り巻く産業に関し理解を深め分析する能力を身に付ける。他の産業に比べたヘルスケアサービス特徴と相違点について理解を深め、どのようなマネジメントが重要であるかについて研究する。望ましい医療・介護経営のあり方について研究し、特に昨今の医薬品や医療機器の役割の重要性、医療安全や臨床研究も含めた質管理のあり方も含め、現状と課題の抽出を行う。また、保健・医療・福祉・介護各分野の連携および連続性によりヘルスケアサービス提供がなされていることを理解する。さらに、ヘルスケアサービスは、基本的には供給側も消費側も人間であるヒューマンサービスが基本であり、人事管理やコミュニケーションも影響要因であることについて研究を発展させる。これらを総合し、自らの関心領域を絞り込み一連の研究を遂行する。

授業計画

<春期>		<秋期>	
第1回	保健・医療・福祉・介護各分野の特徴	第1回	博士論文テーマの絞りこみ
第2回	ヘルスケアサービス・マネジメント	第2回	博士論文テーマに関するプレゼンテーション
第3回	医療経営・介護経営	第3回	文献検討（１）
第4回	医薬品・医療機器業界	第4回	文献検討（２）
第5回	課題の抽出および関心領域の絞り込み	第5回	文献検討（３）
第6回	文献検討（１）	第6回	文献検討（４）
第7回	文献検討（２）	第7回	研究デザインの検討
第8回	文献検討（３）	第8回	テーマに必要な文献リスト作成
第9回	関心テーマの設定	第9回	文献分析（１）
第10回	研究デザインの検討	第10回	文献分析（２）
第11回	テーマに必要な文献リスト作成	第11回	文献分析（３）
第12回	文献分析（１）	第12回	文献分析（４）
第13回	文献分析（２）	第13回	研究の中間的なとりまとめ
第14回	文献分析（３）	第14回	研究成果の報告
第15回	研究成果報告	第15回	研究成果の見直し
第16回	中間取りまとめ	第16回	まとめ

到達目標

- ・ヘルスケアサービス産業についての現状把握と課題の抽出ができる。
- ・医療経営・介護経営についての理解を深められる。
- ・論文作成のための基本的な知識を習得できる。
- ・論文作成に必要な文献の収集および文献検討ができる。
- ・研究デザインの構築を行う。

履修上の注意

自分の関心あるテーマについての絞り込みができ、また深く考察できるよう、学習内容の振り返りを習慣化して欲しい。

評価方法

課題の抽出および理解力、文献収集・分析能力等を総合的に評価する。

テキスト

受講生の研究テーマに応じて適宜指示する。

授業概要

博士論文を作成するための基本前提を習得します。

- ① 論文テーマの設定
- ② テーマに関連する文献の収集と検討
- ③ 第1草稿の作成

授業計画

＜春期＞		＜秋期＞	
第1回	ガイダンス	第1回	博士論文の構成についての検討（1）
第2回	研究テーマの設定と議論（1）	第2回	博士論文の構成についての検討（2）
第3回	研究テーマの設定と議論（2）	第3回	博士論文の構成についての検討（3）
第4回	研究テーマの設定と議論（3）	第4回	テーマに基づく調査と報告（1）
第5回	テーマに関連する諸文献の報告（1）	第5回	テーマに基づく調査と報告（2）
第6回	テーマに関連する諸文献の報告（2）	第6回	テーマに基づく調査と報告（3）
第7回	テーマに関連する諸文献の報告（3）	第7回	テーマに基づく調査と報告（4）
第8回	テーマに関連する諸文献の報告（4）	第8回	テーマに基づく調査と報告（5）
第9回	テーマに関連する諸文献の報告（5）	第9回	テーマに基づく調査と報告（6）
第10回	テーマに関連する諸文献の報告（6）	第10回	テーマに基づく調査と報告（7）
第11回	テーマに関連する諸文献の報告（7）	第11回	研究の中間まとめ
第12回	テーマに関連する諸文献の報告（8）	第12回	第1草稿の作成（1）
第13回	研究テーマの絞り込み（1）	第13回	第1草稿の作成（2）
第14回	研究テーマの絞り込み（2）	第14回	第1草稿の発表と議論（1）
第15回	春期の研究の総括	第15回	第1草稿の発表と議論（2）

到達目標

博士論文の基本要件について習得し、テーマに関連する文献を周到に理解する能力を身につけます。そのうえで、博士論文の予備研究（第1草稿）を作成します。

履修上の注意

研究が学術上意義のあるテーマであることが必要です。既存の研究の成果と問題点を深くつかむように努力してください。

評価方法

報告と議論、予備論文（第1草稿）の内容によって評価します。

テキスト

テーマに関連する重要文献を、相談の上でテキストとします。

授業概要

マーケティング研究のテーマは、歴史研究、理論研究、現状分析研究など多岐にわたるが、それらの研究は日本でのみ行われているわけではなく、北米、欧州においてきわめて活発に行なわれ、また近年はアジア諸国での研究も盛んである。このため「日本語による文献」や「日本語による研究」という狭い枠にとらわれていると、世界で自由闊達に展開されている新たな発想を摂取することはできない。わが国学会の研究水準は一般に高いものがあるが、わが国でのみ通用するいわば「ガラパゴス化」した「精緻な議論」を日本語のみで展開して「自己満足」してしまうことは、学術的に不幸なことである。こうした隘路を打開するためには、英文文献の探索を行なうだけでなく、英語圏の学会（もちろん他の言語でもよい）に適宜参加し、その理論と分析視角を磨くことが必要である。日本の事例を分析する場合であっても、日本の研究は海外でも行われており、また海外の学術的オーディエンスは日本の研究を知りたがっていることを肝に銘じるべきである。博士論文は通常日本語で書かれるが、内容的には国際的に通用力のある論文に仕上げるのが求められ、この特別研究指導Ⅰではその基礎固めが行なえるよう指導する。

授業計画

＜春期＞		＜秋期＞	
第1回	春期へのガイダンス	第1回	秋期へのガイダンス
第2回	研究テーマ設定に関する討論	第2回	分析視角とすべき基礎理論への反対説の検討
第3回	文献探索に関する指導	第3回	分析視角とすべき基礎理論への反対説の検討
第4回	学術論文の技法に関する指導	第4回	分析視角とすべき基礎理論への反対説の検討
第5回	分析視角となりうる国内外の理論の探索	第5回	分析視角とすべき基礎理論への反対説の検討
第6回	分析視角となりうる国内外の理論の探索	第6回	分析視角とすべき基礎理論への反対説の検討
第7回	分析視角となりうる国内外の理論の探索	第7回	博士論文分析視角の形成とその暫定稿の執筆
第8回	分析視角とすべき先行研究リストの作成	第8回	博士論文分析視角の形成とその暫定稿の執筆
第9回	分析視角とすべき先行研究リストの作成	第9回	博士論文分析視角の形成とその暫定稿の執筆
第10回	分析視角とすべき先行研究リストの作成	第10回	博士論文分析視角の形成とその暫定稿の執筆
第11回	分析視角とすべき理論の基本文献の検討	第11回	博士論文分析視角の形成とその暫定稿の執筆
第12回	分析視角とすべき理論の基本文献の検討	第12回	博士論文分析視角の再検討
第13回	分析視角とすべき理論の基本文献の検討	第13回	博士論文分析視角の再検討
第14回	分析視角とすべき理論の基本文献の検討	第14回	博士論文の章別構成第1次案の報告と討論
第15回	分析視角とすべき理論の基本文献の検討	第15回	博士論文の章別構成第1次案の報告と討論

到達目標

①博士論文のテーマを設定し、②国内外学会の新動向の探索を通じ博士論文の分析視角を確立する。

履修上の注意

日本語の文献探索だけでなく、英語（他の言語でもよい）による資料・文献探索は必須である。翻訳のある著作であっても、邦訳から引用して事足りりとするのではなく、直接原文にあたり、原文から自らの訳で引用することが望ましい。

評価方法

研究テーマの設定とその分析視角の確立、そのために費やされた労力によって評価する。

テキスト

＜参考図書＞薄井和夫『実践としてのマーケティング』研究と実践コミュニティ — 『実践論的転回』によせて — 中央大学『商学論纂』第54巻第5号、2013年、165～205ページ。

授業概要

博士論文を完成するための準備作業を行う
 (1) 受講生の問題意識の明確化と論文テーマの設定
 (2) 史・資料、基本文献、統計データのリストアップ
 (3) 当該領域の先行研究の検討と論点の整理
 (4) 主要基本文献の精読と報告
 (5) 以上に基づいて、論文の構成案を作成する

授業計画

＜春期＞		＜秋期＞	
第1回	受講生の問題意識の確認、意見交換	第1回	新しい研究成果の確認、文献リストの補強
第2回	同上	第2回	文献の再検討
第3回	テーマの設定	第3回	史・資料の精読と報告
第4回	史・資料、基本文献の調査とリストの作成	第4回	同上
第5回	同上	第5回	同上
第6回	同上	第6回	同上
第7回	同上	第7回	同上
第8回	基本文献の精読と報告：主要論点の確認	第8回	同上
第9回	同上	第9回	同上
第10回	同上	第10回	同上
第11回	同上	第11回	同上
第12回	同上	第12回	論文の構成案の作成、討議
第13回	同上	第13回	同上
第14回	論点の整理と確認	第14回	論文の構成案の修正
第15回	同上	第15回	同上

到達目標

- ①基本的な文献資料は概ね精読し、理解する。
- ②自らの研究と先行研究との論点の違いを正確に把握する。
- ③論文の構成案を作成する。

履修上の注意

必要な基礎知識、調査スキルを十分に習得しておくこと。
 指導教官に過度に依存せず、能動的・意欲的に課題に取り組むこと。

評価方法

論文への取組み状況と課題の完成度

テキスト

テキストは使用しない。進捗状況に応じてリストにある文献を指示または推奨する。

授業概要

論文のテーマを設定し、研究方法について考察し、先行研究について分析するための指導をする。
そのために、受講者による発表と教員との議論を厳密に行う。

授業計画

<春期>		<秋期>	
第1回	ガイダンス	第1回	論文の各章の報告
第2回	論文の研究テーマの報告	第2回	論文の各章の報告
第3回	論文の研究テーマの報告	第3回	論文の各章の報告
第4回	論文の研究テーマの報告	第4回	論文の各章の報告
第5回	論文の研究テーマの報告	第5回	論文の各章の報告
第6回	論文の研究テーマの設定	第6回	論文の各章の報告
第7回	研究アプローチに関する指導	第7回	論文の再検討
第8回	研究アプローチに関する指導	第8回	論文の再検討
第9回	論文テーマに基づく先行研究分析	第9回	論文の再検討
第10回	論文テーマに基づく先行研究分析	第10回	論文の再検討
第11回	論文テーマに基づく先行研究分析	第11回	論文の再検討
第12回	論文テーマに基づく先行研究分析	第12回	論文の修正
第13回	論文の構成	第13回	論文の修正
第14回	論文の構成	第14回	論文の報告
第15回	論文の報告	第15回	論文の報告

到達目標

博士論文執筆のための基本文献の収集と分析、研究方法についての理解、博士論文テーマの方向性の設定

履修上の注意

綿密な文献分析を求める。

評価方法

先行研究と研究方法についての理解度と研究テーマの独創性

テキスト

指定しない

授業概要

基本的に1対1での個別指導を行う。ただし、履修生が複数の場合、必要に応じてゼミナール形式で行うこともある。第1年次前半は、「問題意識を明確」にして、「先行研究の豊富な読み込み」に基づいて、「適切なテーマを決定」する。1年次後半は、第一部（全体の3分の1程度）の完成を目指して、進める。

授業計画

＜前期＞		＜後期＞	
第1回	テーマ①：関心事項	第1回	第一部の構成（展開方法）
第2回	テーマ②：その分野の現状分析	第2回	第一部の文献読み込み①
第3回	テーマ③：問題点洗い出し	第3回	第一部の文献読み込み②
第4回	テーマ④：問題点評価	第4回	第一部の文献読み込み③
第5回	テーマ⑤：粗々のテーマ決定	第5回	第一部の作成①
第6回	テーマ⑥：先行研究の調査①	第6回	第一部の作成②
第7回	テーマ⑦：先行研究の調査②	第7回	第一部の作成③
第8回	テーマ⑧：先行研究の調査③	第8回	第一部の作成④
第9回	テーマ⑨：テーマ絞り込み①	第9回	第一部の作成⑤
第10回	テーマ⑩：テーマ絞り込み②（決定）	第10回	第一部の作成⑥
第11回	先行研究①：報告①	第11回	第一部の作成⑦
第12回	先行研究②：報告②	第12回	第一部の作成⑧
第13回	先行研究③：報告③	第13回	第一部のチェック・まとめ①
第14回	論文アプローチ	第14回	第一部のチェック・まとめ②
第15回	論文構成（全体の展開方法）	第15回	第一部のチェック・まとめ③

到達目標

仮に、博士論文全体が合計3つの部からなる場合、第1年次には、第一部の完成、2年次の春期には、第二部の完成、2年次の秋期には第三部の完成を目標とするイメージで進めた方がよい。また、各年次においては、2万字程度の個別研究論文1、2本を発表することが望まれる。これら数本の個別論文（可能な限り関連学会で発表すること）が、博士論文の下地になるイメージである。

履修上の注意

授業の度に、毎回報告する。報告に当たっては、春期は全ての回を通じて、論者比較表の提出を、それ以降特別研究指導Ⅲを修了するまでは、四点セット（説明・質問等メモ、要旨、本文、論理展開図）を指導の事前に提出する。特に、研究科で発表会がある場合はその前に、発表内容の完成度を特に上げた内容で報告をすること。博士論文の作成は、指導教授からの指示を待っているようでは、完成はおぼつかない。全て自ら考えて、自ら実施し、積極的に進めるという意識で履修すること。文献の収集、読み込み、特に批判的思考は重要である。なぜなら、論文の中の独創性は、地道な先行研究の調査と批判的精神からのみ生まれるのだから。さらに、論文の意義を高めるために、論文の目的から逆算して、先行研究に足りないところは何かという意識を、3年間、常に持ち続けて、論文作成に集中すること。なお、論文のどの箇所を執筆する場合であっても、①今書いているこの箇所は全体の中でどう位置付くのか、それは明確か、②次以降に書く内容との論理的な繋がりがあがるか、それは適切か、③今書いたことの根拠を書いたか、書いたならその根拠の提示は具体的かつ明確で十分な提示となっているか、④今書いたことの意味は何か、その意味は論文の中でどの程度重要性を持つのか、等に留意して、記述を進めることが大切である（特別研究指導Ⅲまで同じ）。

評価方法

基本的に、研究の進捗と深度（発表内容の質の高さを含む）で評価する。

テキスト

必要に応じて指示する。なお、参考書は、金子宏著「租税法（第24版）」（弘文堂、2021年）とする。

授業概要

博士論文作成のための方法論、基礎知識を修得する。

- 1) 論文テーマに関する問題設定、課題の抽出とテーマの絞り込み
- 2) 基本的な文献収集とその理解
- 3) 論テーマに沿った先行研究の論点整理

授業計画

＜春期＞		＜秋期＞	
第1回	受講生の問題意識の確認	第1回	博士論文の構成と作成方法
第2回	論文テーマに関しての大まかな検討	第2回	博士論文の構成と作成方法
第3回	論文テーマに関しての基本文献調査	第3回	論文構成に必要な文献の整理
第4回	基本文献の報告	第4回	文献の検討と報告
第5回	同上	第5回	同上
第6回	同上	第6回	同上
第7回	同上	第7回	同上
第8回	同上	第8回	同上
第9回	論文テーマの絞り込み	第9回	研究の中間的なまとめ
第10回	先行研究の文献リストの作成	第10回	同上
第11回	先行研究の報告	第11回	同上
第12回	同上	第12回	同上
第13回	同上	第13回	同上
第14回	同上	第14回	同上
第15回	研究の報告と論点整理	第15回	研究成果の報告

到達目標

- ・論文構成に必要な論理的思考能力と、先行研究を踏まえた論点の整理ができる能力などを身に付けることを目標とします。

履修上の注意

- ・問題意識のもとに設定する論文テーマに基づいた先行研究などの研究文献を丹念に調査し、学生と学ぶと共に、それに関しての報告ができるようにすること。

評価方法

- ・報告と積極的な議論への参加を総合的に評価します。

テキスト

- ・研究テーマに即して、適宜指示します。

授業概要

博士論文作成のための方法論、基本知識を習得する。そのために以下を指導する。

- ① 博士論文テーマに関する問題設定とテーマの絞り込み。
- ② テーマの問題設定のための基本的および広範囲な文献収集とその理解。
- ③ 論文テーマに沿った先行研究の論点の整理

授業計画

＜春期＞		＜秋期＞	
第1回	受講院生の問題意識の確認	第1回	博士論文の方法論に関する指導
第2回	論文テーマに関してのラフな検討	第2回	博士論文の構成の作成
第3回	論文テーマに関連した基本的文献収集	第3回	論文構成に必要な文献の整理と収集
第4回	基本的文献のリスト作成	第4回	文献の検討と報告・討論
第5回	基本的文献に関する報告・討論	第5回	文献の検討と報告・討論
第6回	基本的文献に関する報告・討論	第6回	文献の検討と報告・討論
第7回	基本的文献に関する	第7回	文献の検討と報告・討論
第8回	博士論文テーマの絞り込み	第8回	論文の構成（論理展開）を検討
第9回	論文テーマに即した先行文献リスト作成	第9回	研究の中間的なとりまとめ
第10回	先行文献に関する報告・討論	第10回	研究の中間的なとりまとめ
第11回	先行文献に関する報告・討論	第11回	研究の中間的なとりまとめ
第12回	先行文献に関する報告・討論	第12回	研究の中間的なとりまとめ
第13回	先行文献に関する報告・討論	第13回	研究の中間的なとりまとめ
第14回	先行文献に関する報告・討論	第14回	研究の中間的なとりまとめ
第15回	研究報告と論点整理、研究課題の確認	第15回	研究成果の報告

到達目標

研究に対する問題意識をクリアにし、先行文献を読んで研究・検討し、論文テーマを絞り込む。その後、論文の構成（論理展開）を作成する。

履修上の注意

論文テーマに関連した先行文献を読了し、批判力を付けること。

評価方法

授業での報告と研究の進捗状況により総合的に評価する。

テキスト

研究テーマに即して適宜指示する。

授業概要

博士論文の執筆に関する指導を行います。博士論文は、関連性の深いテーマの下で、4本程度の独立した論文で構成されるのが一般的です。博士2年次では、2本程度の論文を執筆するとともに、学会や外部のセミナーなどで報告できるようになることが望ましいです。

授業計画

<春期>		<秋期>	
第1回	第1論文の計画書報告	第1回	第2論文の計画書報告
第2回	第1論文の修正計画書報告	第2回	第2論文の修正計画書報告
第3回	第1論文の作業経過報告	第3回	第2論文の作業経過報告
第4回	同上	第4回	同上
第5回	同上	第5回	同上
第6回	同上	第6回	同上
第7回	同上	第7回	同上
第8回	同上	第8回	同上
第9回	第1論文1次稿の完成と報告	第9回	第2論文1次稿の完成と報告
第10回	第1論文1次稿の問題点の洗い出しと修正	第10回	第2論文1次稿の問題点の洗い出しと修正
第11回	同上	第11回	同上
第12回	第1論文2次稿の完成と報告	第12回	第2論文2次稿の完成と報告
第13回	第1論文2次稿の問題点の洗い出しと修正	第13回	第2論文2次稿の問題点の洗い出しと修正
第14回	同上	第14回	同上
第15回	第1論文の完成と報告	第15回	第2論文の完成と報告

到達目標

アカデミックに重要な貢献を含んだ学術論文を複数執筆することを目標とします。

履修上の注意

博士論文を執筆するというのは、膨大な時間と心身両面でのかなりの労力を要しますので、十分な覚悟を持って取り組んでください。

評価方法

各回の報告と進捗状況に基づいて、総合的に評価します。

テキスト

必要な文献は、適宜指示します。

授業概要

研究の進捗状況を踏まえて、博士論文の前提となる学術論文（最終論文の一部を構成する論文）を公刊誌に掲載発表するための 研究指導を行う。論文テーマの再吟味（適切性など）、理論の整合性の検討、文献サーベイあるいは実証分析の妥当性などを精査する。また、学会やワークショップに参加し、研究成果を発信していく。

授業計画

＜春期＞		＜秋期＞	
第1回	学術論文テーマの明確化	第17回	論文の作成・報告・討論(1)
第2回	テーマ関連の文献収集	第18回	論文の作成・報告・討論(2)
第3回	主要な論点毎の小論文の作成(1)	第19回	論文の作成・報告・討論(3)
第4回	主要な論点毎の小論文の作成(2)	第20回	論文の作成・報告・討論(4)
第5回	主要な論点毎の小論文の作成(3)	第21回	論文の作成・報告・討論(5)
第6回	主要な論点毎の小論文の作成(4)	第22回	論文の作成・報告・討論(6)
第7回	主要な論点毎の小論文の作成(5)	第23回	論文の作成・報告・討論(7)
第8回	主要な論点毎の小論文の作成(6)	第24回	研究報告
第9回	主要な論点毎の小論文の作成(7)	第25回	論文の構成・検討・修正(1)
第10回	主要な論点毎の小論文の作成(8)	第26回	論文の構成・検討・修正(2)
第11回	研究の見直し	第27回	見直し後の論文の作成・報告(1)
第12回	文献報告(1)	第28回	見直し後の論文の作成・報告(2)
第13回	文献報告(2)	第29回	見直し後の論文の作成・報告(3)
第14回	文献報告(3)	第30回	見直し後の論文の作成・報告(4)
第15回	部研報告(4)	第31回	見直し後の論文の作成・報告(5)
第16回	研究成果の報告	第32回	研究成果の報告

到達目標

- ・博士論文提出の前提となる学術論文の提出。
- ・論文のオリジナリティの明確化。

履修上の注意

論文作成の進捗ごとに緻密な研究指導を受けること。

評価方法

- ・自立した研究者としての自覚を持つこと。

テキスト

学生の研究テーマに応じて指示する。

授業概要

Iで学んだヘルスケアサービスを取り巻く市場について理解を深める。ヘルスケアコンシューマー行動に影響を及ぼす因子、満足度を規定する要因、情報の公開によるコンシューマーおよびヘルスケアサービス提供機関双方に与える影響、消費者のエンパワメントに必要な要素、意思決定支援について多面的に指導する。保険システムや診療報酬制度などのヘルスケアシステムについても理解を深め、診療機能や規模なども考慮に入れ、ベスト・プラクティスを目指すためのマネジメントについて研究指導する。

授業計画

<春期>		<秋期>	
第1回	ヘルスケアサービス市場の理解	第1回	文献報告
第2回	ヘルスケアコンシューマー行動の理解	第2回	同上
第3回	これまでの学習の整理と研究内容の見直し	第3回	論文作成・報告
第4回	学術論文テーマの明確化	第4回	同上
第5回	学術論文の構成（目次）の作成	第5回	同上
第6回	構成に基づく研究報告	第6回	同上
第7回	研究報告1	第7回	同上
第8回	研究報告2	第8回	同上
第9回	研究報告3	第9回	研究見直し
第10回	研究報告4	第10回	論文作成・報告
第11回	研究報告5	第11回	同上
第12回	ヘルスケアシステムの理解	第12回	同上
第13回	ベスト・プラクティスの理解	第13回	同上
第14回	研究の見直し	第14回	同上
第15回	オリジナリティーについての検討	第15回	同上
第16回	必要文献の補強	第16回	学術論文提出

到達目標

- ・学術論文が作成できる。
- ・論文のオリジナリティーを明確にすることができる。

履修上の注意

自らがもっとも関心のあるテーマについて、学術論文としてまとめあげられるようしっかりと研究指導を受けることを求める。

評価方法

作成した学術論文を総合的に評価する。

テキスト

受講生の研究テーマに応じて適宜指示する。

授業概要

博士論文の一部を構成する学術論文を作成します。明確な問題設定と、既存の研究について周到な理解を踏まえて、独創的な論文の作成を目指します。関連する学会での報告を行い、専門家からの忌憚のない意見を得る必要があります。

- ① あらためて関連論文の検討をおこなう。
- ② 学術論文の作成と公表。
- ③ 学会報告。
- ④ 博士論文全体を包括した予備研究（第2草稿）を作成する。

授業計画

＜春期＞		＜秋期＞	
第1回	第1草稿の見直しとテーマの確定（1）	第1回	第2草稿の報告と議論（1）
第2回	第1草稿の見直しとテーマの確定（2）	第2回	第2草稿の報告と議論（2）
第3回	テーマに関連する諸文献の報告（1）	第3回	第2草稿の報告と議論（3）
第4回	テーマに関連する諸文献の報告（2）	第4回	第2草稿の報告と議論（4）
第5回	テーマに関連する諸文献の報告（3）	第5回	第2草稿の報告と議論（5）
第6回	テーマに関連する諸文献の報告（4）	第6回	研究の中間まとめ
第7回	テーマに基づく調査と報告（1）	第7回	学会報告の準備（1）
第8回	テーマに基づく調査と報告（2）	第8回	学会報告の準備（2）
第9回	テーマに基づく調査と報告（3）	第9回	学会報告の原稿作成（1）
第10回	テーマに基づく調査と報告（4）	第10回	学会報告の原稿作成（2）
第11回	研究の中間まとめ	第11回	学会報告の反省と今後の課題
第12回	第2草稿の作成作業（1）	第12回	学術論文の準備と報告（1）
第13回	第2草稿の作成作業（2）	第13回	学術論文の準備と報告（2）
第14回	第2草稿の作成作業（3）	第14回	学術論文の準備と報告（3）
第15回	第2草稿の予備報告	第15回	学術論文の提出

到達目標

研究・論文の独創性を明確にし、博士論文の予備研究（第2草稿）の提出、学会報告、学術論文の作成を行います。

履修上の注意

学術研究の基本要件（研究テーマの学術的意義・重要性、問題設定の妥当性、明快な論旨、導かれた結論の説得性など）をよく理解することが重要です。

研究上で遭遇した困難や課題などについては一人で抱えず、指導教員とよく協議するよう心掛けてください。

評価方法

学術論文、第2草稿、学会報告の内容で評価します。

テキスト

テーマに関連する重要文献を、相談の上でテキストとします。

授業概要

特別研究指導Ⅱでは、前年の特別研究指導Ⅰを受けて、博士論文の分析視角に関する先行文献サーベイを完了し、実態調査が必要である場合は、実態調査の具体的な設計と調査を行なう。理論的ないし歴史的テーマの場合は、取り上げる対象の分析をさらに進化させる。また、博士論文を構成する成果の一部をわが国学会や海外学会で報告し、国内外での討論という洗礼を受けることを通じて、博士論文の質をより深化したものにす。以上を通じ、年度末までに、博士論文の章別編成をほぼ完成することができるように指導する。

授業計画

＜春期＞		＜秋期＞	
第1回	春期へのガイダンス	第1回	秋期へのガイダンス
第2回	博士論文の現段階に関する報告と討論	第2回	実態調査計の遂行結果、理論的・歴史的的分析素材の拡大深化の結果報告
第3回	学術論文の技法に関する確認と指導	第3回	実態調査計の遂行結果、理論的・歴史的的分析素材の拡大深化の結果報告
第4回	分析視角となる国内外の理論のまとめ	第4回	実態調査計の遂行結果、理論的・歴史的的分析素材の拡大深化の結果報告
第5回	分析視角となる国内外の理論のまとめ	第5回	実態調査計の遂行結果、理論的・歴史的的分析素材の拡大深化の結果報告
第6回	分析視角となる国内外の理論のまとめ	第6回	実態調査計の遂行結果、理論的・歴史的的分析素材の拡大深化の結果報告
第7回	分析視角となる国内外の理論のまとめ	第7回	内外学会において博士論文の一部を学術論文として発表することへの指導
第8回	分析視角となる国内外の理論のまとめ	第8回	内外学会において博士論文の一部を学術論文として発表することへの指導
第9回	国内外学会での報告可能性の検討と指導	第9回	内外学会において博士論文の一部を学術論文として発表することへの指導
第10回	国内外学会での報告可能性の検討と指導	第10回	内外学会において博士論文の一部を学術論文として発表することへの指導
第11回	実態調査計画作成または理論的・歴史的 分析素材の拡大深化の探索	第11回	内外学会において博士論文の一部を学術論文として発表することへの指導
第12回	実態調査計画作成または理論的・歴史的 分析素材の拡大深化の探索	第12回	内外学会において博士論文の一部を学術論文として発表することへの指導
第13回	実態調査計画作成または理論的・歴史的 分析素材の拡大深化の探索	第13回	博士論文章別編成の検討
第14回	実態調査計画作成または理論的・歴史的 分析素材の拡大深化の探索	第14回	博士論文章別編成の検討
第15回	実態調査計画作成または理論的・歴史的 分析素材の拡大深化の探索	第15回	博士論文章別編成の確定

到達目標

①博士論文の章別構成の確立。②博士論文の一部を学術論文として刊行。③テーマが実態分析の場合は実態調査の遂行。テーマが理論的・歴史的の研究の場合は、検討の射程範囲の確定。

履修上の注意

わが国学会だけでなく、海外学会での動向をきちんとサーベイすること、および国内外の学会に参加することは、国際的に通用力のある博士論文完成のための必須条件である。

評価方法

博士論文の章別構成の具体性、博士論文の一部をどのように学術論文化できたかどうかを基本とし、そのために費やされた労力によって評価する。

テキスト

＜参考図書＞

Kazuo Usui, *The Development of Marketing Management: The Case of the USA c.1910-1940*, Aldershot, UK: Ashgate, 2008.
 Kazuo Usui, *Marketing and Consumption in Modern Japan*, Abington, UK: Routledge, 2014.
 Kazuo Usui, "Japanese retailing", in Parissa Hagahirian ed., *Routledge Handbook of Japanese Business and Management*, Abington, UK: Routledge, 2014, pp.284-296.

授業概要

初年度に行った史・資料の精読、先行研究への批判的検討の結果に基づき、自らの新しい論点と論文のオリジナリティーを明確化し、年度前半に博士論文の一部となる学術論文の執筆、年度後半に書き上げた論文の全部または完成度の高い部分を学会で発表し、学会誌などに掲載できるように研究指導を行う。

授業計画

＜春期＞		＜秋期＞	
第1回	博士論文の論点とオリジナリティーの明確化	第1回	年度前半の研究内容の振り返り、後半の研究課題の再確認
第2回	同上	第2回	学術論文の作成・報告
第3回	学術論文のテーマ・構成についての検討	第3回	同上
第4回	同上（テーマの適切性、実証の可能性など）	第4回	同上
第5回	構成に即した研究報告	第5回	同上
第6回	同上	第6回	同上
第7回	同上	第7回	同上
第8回	同上	第8回	同上
第9回	同上	第9回	同上
第10回	同上	第10回	報告内容の再検討・見直し
第11回	同上	第11回	同上
第12回	同上	第12回	研究報告
第13回	テーマ、構成の見直し	第13回	研究報告
第14回	史・資料の追加・補強	第14回	学術論文の提出と博士論文第一次稿の完成
第15回	研究報告の問題点の確認	第15回	同上

到達目標

- ①学会報告および執筆論文の学会誌での掲載発表
- ②博士論文第一次稿の完成

履修上の注意

- ①学会報告、学術論文の掲載発表を必ず達成するよう最大限に努力すること。
- ②指導教官の指示に従いながら、能動的・意欲的に研究課題に取り組むこと。

評価方法

報告内容、作成した学術論文の内容によって評価する。

テキスト

文献は必要に応じてその都度指示する。

授業概要

博士論文のテーマの再確認・論文の構成の検討・各章の吟味、等々を行う。
 研究アプローチ・先行文献の分析の妥当性を検討する。
 妥当な研究テーマを設定し、論文の全体像を提示することができるよう指導する。

授業計画

＜春期＞		＜秋期＞	
第1回	研究テーマの確認	第1回	論文の前半部分の報告
第2回	研究の方向性の検討	第2回	論文の前半部分の報告
第3回	研究の進捗および予定の確認	第3回	論文の前半部分の報告
第4回	研究テーマの報告	第4回	論文の前半部分の報告
第5回	研究テーマの報告	第5回	論文の前半部分の報告
第6回	先行研究の分析・報告	第6回	論文の前半部分の報告
第7回	先行研究の分析・報告	第7回	論文の後半部分の報告
第8回	先行研究の分析・報告	第8回	論文の後半部分の報告
第9回	論文構成の検討	第9回	論文の後半部分の報告
第10回	論文構成の検討	第10回	論文の後半部分の報告
第11回	論文構成の検討	第11回	論文の後半部分の報告
第12回	序論部分の報告	第12回	論文の後半部分の報告
第13回	序論部分の報告	第13回	論文の全体を報告
第14回	序論部分の報告	第14回	論文の全体を報告
第15回	春期の総括	第15回	論文の全体を報告

到達目標

妥当な研究テーマを設定し、論文の構成を検討し、論文の全体像をまとめ上げる。

履修上の注意

論文執筆のために先行文献を徹底して分析し、議論し、検討することを求める。

評価方法

論文の進捗状況と研究姿勢

テキスト

適宜指示する

授業概要

基本的に1対1での個別指導を行う。ただし、履修生が複数の場合、必要に応じてゼミナール形式で行うこともある。第2年次前半は、第二部の完成を目指して進める。2年次後半は、第三部の完成を目指して、進める。

授業計画

＜前期＞		＜後期＞	
第1回	第二部の構成（展開方法）	第1回	第三部の構成（展開方法）
第2回	第二部の文献読み込み①	第2回	第三部の文献読み込み①
第3回	第二部の文献読み込み②	第3回	第三部の文献読み込み②
第4回	第二部の文献読み込み③	第4回	第三部の文献読み込み③
第5回	第二部の作成①	第5回	第三部の作成①
第6回	第二部の作成②	第6回	第三部の作成②
第7回	第二部の作成③	第7回	第三部の作成③
第8回	第二部の作成④	第8回	第三部の作成④
第9回	第二部の作成⑤	第9回	第三部の作成⑤
第10回	第二部の作成⑥	第10回	第三部の作成⑥
第11回	第二部の作成⑦	第11回	第三部の作成⑦
第12回	第二部の作成⑧	第12回	第三部の作成⑧
第13回	第二部のチェック・まとめ①	第13回	第三部のチェック・まとめ①
第14回	第二部のチェック・まとめ②	第14回	第三部のチェック・まとめ②
第15回	第二部のチェック・まとめ③	第15回	第三部のチェック・まとめ③

到達目標

仮に、博士論文が合計3部からなる場合、第2年次の春期には、第二部の完成、2年次の秋期には第三部の完成を目標とするイメージで進めた方がよい。また、各年次においては、2万字程度の個別研究論文を、1-2本を発表することが望まれる。これら数本の個別論文が、博士論文の下地になるイメージである。

履修上の注意

授業の度に、毎回報告する。報告に当たっては、特別研究指導Ⅲを修了するまでは、四点セット（説明・質問等メモ、要旨、本文、論理展開図）を事前に提出する。特に、発表会がある場合はその前に、発表内容の完成度を特に上げた内容で報告をすること。博士論文の作成は、指導教授からの指示を待っているようでは、完成はおぼつかない。全て自ら考えて、自ら実施し、積極的に進めるという意識で履修すること。文献の収集、読み込み、特に批判的思考は重要である。なぜなら、論文の中の独創性は、地道な先行研究の調査と批判的精神からのみ生まれるのだからである。さらに、論文の意義を高めるために、論文の目的から逆算して、先行研究に足りないところは何かという意識を、3年間、常に持ち続けて、論文作成に集中し、授業に出席すること。

なお、論文のどの箇所を執筆する場合であっても、①今書いているこの箇所は全体の中でどう位置付くのか、それは明確か、②次に書く内容との論理的な繋がりがあがるか、それは適切か、③今書いたことの根拠を書いたか、書いたならその根拠の提示は具体的かつ明確で十分な提示となっているか、④今書いたことの意味は何か、その意味は論文の中でどの程度重要性を持つのか、等に留意して、記述を進めることが大切である。

評価方法

基本的に、研究の進捗と深度（発表内容の質の高さを含む）に対して100%配分で評価する。

テキスト

必要に応じて、指示する。なお、参考書は、基本的に、金子宏著「租税法（第24版）」（弘文堂、2021年）とする。

授業概要

学術論文の作成と発表を指導する。この学術論文は、博士論文を提出する前提であるだけでなく、博士論文を構成する重要な論点の一つである。このため、論点の明確化は言うに及ばず、先行研究との関係性を論じることができるように研鑽すること。

また、論文構成の妥当性、合理性、そして新規性を意識した研究ができるように指導する。

授業計画

＜春期＞		＜秋期＞	
第1回	学術論文のテーマを明確にする	第1回	論文の作成と報告
第2回	学術論文の構成の作成	第2回	同上
第3回	構成に即しての研究報告	第3回	同上
第4回	同上	第4回	同上
第5回	同上	第5回	同上
第6回	同上	第6回	同上
第7回	同上	第7回	研究の見直し
第8回	同上	第8回	論文の作成と報告
第9回	同上	第9回	同上
第10回	研究の見直し	第10回	同上
第11回	研究の報告	第11回	同上
第12回	同上	第12回	同上
第13回	同上	第13回	同上
第14回	同上	第14回	学術論文の報告と指導
第15回	研究成果の報告	第15回	学術論文の報告と指導

到達目標

- 論文構成に必要な論理的思考力と、先行研究を踏まえた論点の整理ができる能力などを身につけること。さらに、論文内容が独自性と新規性を備えるために必要な思考能力も身に付けることを目標とします。

履修上の注意

- 学術論文を作成するための研鑽と報告を適宜行うこと。

評価方法

- 作成した学術論文により、評価します。

テキスト

- 研究テーマに即して、適宜指示します。

授業概要

博士論文作成のための草稿（第一次稿）作成を目標とし、そのために以下を指導する。

- ① 博士論文テーマに関する問題設定を明確にする。
- ② 論文テーマに沿った先行研究を批判的に分析し、自分の論点との相違を整理。
- ③ 研究成果を学会、学会誌、ワークショップなどで公開していく。

授業計画

＜春期＞		＜秋期＞	
第1回	博士論文のテーマを明確にする	第1回	博士論文の作成・報告・討論
第2回	博士論文の論文構成（目次）の作成	第2回	博士論文の作成・報告・討論
第3回	論文構成に即して順次研究報告・討論	第3回	博士論文の作成・報告・討論
第4回	論文構成に即して順次研究報告・討論	第4回	博士論文の作成・報告・討論
第5回	論文構成に即して順次研究報告・討論	第5回	博士論文の作成・報告・討論
第6回	論文構成に即して順次研究報告・討論	第6回	博士論文の作成・報告・討論
第7回	論文構成に即して順次研究報告・討論	第7回	博士論文の作成・報告・討論
第8回	論文構成に即して順次研究報告・討論	第8回	研究の中間的なとりまとめ
第9回	論文構成に即して順次研究報告・討論	第9回	研究報告
第10回	論文構成に即して順次研究報告・討論	第10回	研究の見直し
第11回	論文構成に即して順次研究報告・討論	第11回	博士論文の作成・報告・討論
第12回	論文テーマ・論文構成の見直し	第12回	博士論文の作成・報告・討論
第13回	先行文献に関する報告・討論	第13回	博士論文の作成・報告・討論
第14回	先行文献に関する報告・討論	第14回	博士論文の作成・報告・討論
第15回	研究報告と論点整理、研究課題の確認	第15回	博士論文草稿（第一次稿）の提出

到達目標

博士論文の草稿（第一次稿）提出。
論文の新規性、オリジナリティの明確化。

履修上の注意

学術論文の基本的要件（研究テーマの学術的意味、新規性、オリジナリティ、先行研究検索、論理構成、分析手法、問題設定と結論の整合性など）を守って論文執筆をすることが重要。

評価方法

提出された博士論文草稿（第一次稿）にて評価する。

テキスト

研究テーマに即して適宜指示する。

授業概要

博士論文の執筆に関する指導を行います。博士論文は、関連性の深いテーマの下で、4本程度の独立した論文で構成されるのが一般的です。博士3年次では、博士論文を完成させるとともに、学会報告や査読誌への投稿などができることが望ましいです。

授業計画

<春期>		<秋期>	
第1回	第3論文の計画書報告	第1回	第4論文の計画書報告
第2回	第3論文の修正計画書報告	第2回	第4論文の修正計画書報告
第3回	第3論文の作業経過報告	第3回	第4論文の作業経過報告
第4回	同上	第4回	同上
第5回	同上	第5回	同上
第6回	同上	第6回	同上
第7回	同上	第7回	第4論文1次稿の完成と報告
第8回	同上	第8回	第4論文1次稿の問題点の洗い出しと修正
第9回	第3論文1次稿の完成と報告	第9回	同上
第10回	第3論文1次稿の問題点の洗い出しと修正	第10回	第4論文2次稿の完成と報告
第11回	同上	第11回	第4論文2次稿の問題点の洗い出しと修正
第12回	第3論文2次稿の完成と報告	第12回	同上
第13回	第3論文2次稿の問題点の洗い出しと修正	第13回	第4論文の完成と報告
第14回	同上	第14回	博士論文の完成と提出
第15回	第3論文の完成と報告	第15回	最終試験の準備

到達目標

アカデミックに重要な貢献を含んだ博士論文を完成させることを目標とします。

履修上の注意

博士論文を執筆するというのは、膨大な時間と心身両面でのかなりの労力を要しますので、十分な覚悟を持って取り組んでください。

評価方法

各回の報告と進捗状況に基づいて、総合的に評価します。

テキスト

必要な文献は、適宜指示します。

授業概要

テーマをさらに発展させ、深化させて、博士論文としてオリジナリティを十分明確化し、学術論文としての成果あるものとなるよう研究指導する。

授業計画

<春期>		<秋期>	
第1回	博士論文のテーマの最終的確定	第17回	論文作成・報告(1)
第2回	既発表論文の補強点の明確化	第18回	論文作成・報告(2)
第3回	必要文献の見直し	第19回	論文作成・報告(3)
第4回	文献報告(1)	第20回	論文作成・報告(4)
第5回	文献報告(2)	第21回	論文作成・報告(5)
第6回	文献報告(3)	第22回	中間報告会資料作成
第7回	中間報告会用資料作成	第23回	中間報告会資料作成
第8回	同上	第24回	論文作成・報告(1)
第9回	論文作成・報告(1)	第25回	論文作成・報告(2)
第10回	論文作成・報告(2)	第26回	論文作成・報告(3)
第11回	論文作成・報告(3)	第27回	論文作成・報告(4)
第12回	論文作成・報告(4)	第28回	論文作成・報告(5)
第13回	論文作成・報告(5)	第29回	論文作成・報告(6)
第14回	論文作成・報告(6)	第30回	論文の提出
第15回	論文作成・報告(7)	第31回	最終試験準備
第16回	研究成果の報告	第32回	最終試験準備

到達目標

- ・博士論文の完成
- ・自立した研究者の育成

履修上の注意

- ・自立した研究者としての自覚を持つこと

評価方法

- ・自立した研究者としての自覚を持つこと

テキスト

学生の研究テーマに応じて指示する。

授業概要

Ⅱまでで学んだ知識をベースに、国際的な視野からヘルスケアサービスの質について学ぶ。ヘルスケアサービスのグローバル化が進むことによる効果、および新たに生じるリスクについても理解を深める。また医療経営に必要なマネジメント能力とはどのようなものかについても総合的に研究指導する。更に、ヘルスケアサービス提供組織は、多職種によるダイバーシティ・マネジメントが求められることについても指導する。第三者評価などヘルスケアサービスの質保証についても理解を深め、質評価の切り口（ストラクチャー・プロセス・アウトカム）および指標について、医療安全も含めて研究指導する。

授業計画

<春期>		<秋期>	
第1回	国際的視野から見たヘルスケアサービスの理解	第1回	論文最終見直し
第2回	海外文献研究1	第2回	論文作成・報告
第3回	海外文献研究2	第3回	同上
第4回	海外文献研究3	第4回	同上
第5回	博士論文テーマの最終決定	第5回	同上
第6回	既発表論文の見直し	第6回	中間報告会資料作成
第7回	中間報告会用資料作成	第7回	同上
第8回	同上	第8回	論文作成・報告
第9回	博士論文の構成（目次）の確定	第9回	同上
第10回	文献リスト作成指導	第10回	同上
第11回	論文作成・報告	第11回	同上
第12回	同上	第12回	同上
第13回	同上	第13回	同上
第14回	同上	第14回	批判的検討
第15回	同上	第15回	論文の提出
第16回	質評価や安全についての理解	第16回	最終試験準備

到達目標

博士論文を完成させる。
グローバルな視点で研究を遂行する能力を身につける。

履修上の注意

客観的な視点を持つこと、論理的な思考と整理能力を養うよう努力すること。

評価方法

博士論文作成プロセスを通して、論文作成能力を評価する。
研究倫理および研究者としての自立度を評価する。

テキスト

適宜必要に応じて授業内に指示する。

授業概要

2 年次の研究成果（学術論文等）を踏まえ、博士論文の作成に向けて研究を飛躍させる。必要に応じて研究テーマの再度の検証、既存の研究などについての再整理、補強的な学習、追加的な調査などを行う。第 3 草稿を仕上げ、これを踏まえて博士論文を完成させる。

授業計画

<春期>		<秋期>	
第 1 回	2 年次の研究成果と今後の課題の確認（1）	第 1 回	第 3 草稿の提出と議論
第 2 回	2 年次の研究成果と今後の課題の確認（1）	第 2 回	博士論文の各章ごとの作成と議論（1）
第 3 回	博士論文のテーマの確定と、基本構成の議論（1）	第 3 回	博士論文の各章ごとの作成と議論（2）
第 4 回	博士論文のテーマの確定と、基本構成の議論（2）	第 4 回	博士論文の各章ごとの作成と議論（3）
第 5 回	博士論文のテーマの確定と、基本構成の議論（3）	第 5 回	博士論文の各章ごとの作成と議論（4）
第 6 回	テーマに関する既存の研究の再整理（1）	第 6 回	博士論文の各章ごとの作成と議論（5）
第 7 回	テーマに関する既存の研究の再整理（2）	第 7 回	博士論文の各章ごとの作成と議論（6）
第 8 回	中間報告会に向けた準備（1）	第 8 回	中間報告の原稿提示
第 9 回	中間報告会に向けた準備（2）	第 9 回	中間報告の内容の反省と今後の課題
第 10 回	中間報告の原稿提示	第 10 回	博士論文の改訂と議論（1）
第 11 回	中間報告の内容の反省と今後の課題（1）	第 11 回	博士論文の改訂と議論（2）
第 12 回	中間報告の内容の反省と今後の課題（2）	第 12 回	博士論文（完成稿）の提出
第 13 回	第 3 草稿の作成作業と報告（1）	第 13 回	残された課題の整理
第 14 回	第 3 草稿の作成作業と報告（2）	第 14 回	最終試験の準備（1）
第 15 回	第 3 草稿の作成作業と報告（3）	第 15 回	最終試験の準備（2）

到達目標

独創的な博士論文を作成し、研究者として自立する。

履修上の注意

学術研究の基本要件（研究テーマの学術的意義・重要性、問題設定の妥当性、明快な論旨、導かれた結論の説得性など）を満たした論文を仕上げる。

評価方法

博士論文のオリジナリティー、博士論文に向かう研究姿勢で評価する。

テキスト

必要に応じて相談する。

授業概要

特別研究指導Ⅰ、Ⅱでの成果を踏まえ、この特別研究指導Ⅲでは、博士論文の完成を指導する。博士論文の完成は並大抵の努力ではおぼつかないが、ここでは、受講生の努力を前提として、内外学会の水準を凌駕し、内容的に国際的に通用できる博士論文の完成を指導する。

授業計画

＜春期＞		＜秋期＞	
第1回	春期へのガイダンス	第1回	秋期へのガイダンス
第2回	博士論文の現段階に関する報告と討論	第2回	海外学会における動向の再検討
第3回	博士論文の現段階に関する報告と討論	第3回	海外学会における動向の再検討
第4回	単独論文の作成と指導	第4回	海外学会における動向の再検討
第5回	単独論文の作成と指導	第5回	海外学会における動向の再検討
第6回	単独論文の作成と指導	第6回	海外学会における動向の再検討
第7回	単独論文の作成と指導	第7回	博士論文内容の章別点検
第8回	単独論文の作成と指導	第8回	博士論文内容の章別点検
第9回	博士論文章別校正の再検討	第9回	博士論文内容の章別点検
第10回	博士論文章別校正の再検討	第10回	博士論文内容の章別点検
第11回	博士論文のための追加調査の計画と討論	第11回	博士論文内容の章別点検
第12回	博士論文のための追加調査の計画と討論	第12回	博士論文内容の章別点検
第13回	博士論文のための追加調査の計画と討論	第13回	学術論文完成のための指導
第14回	博士論文のための追加調査の計画と討論	第14回	学術論文完成のための指導
第15回	博士論文のための追加調査の計画と討論	第15回	博士論文完成報告

到達目標

博士論文のための追加調査の遂行、国内外学会動向の再点検、博士論文の一部の個別論文としての刊行を通じ、日本語で書かれる博士論文であっても、内容的に国際的に通用力のある博士論文を完成させることを基本目標とする。

履修上の注意

博士論文の一部を単独論文として刊行することは、博士論文完成の里程標である。このためには、国内外の学会に参加し、学術論文刊行の機会を探索することが必要となる。

評価方法

基本的に博士論文の完成が評価の基準である。

テキスト

＜参考図書＞

薄井和夫「マーケティング史研究におけるマーケティング概念の多義性について」拓殖大学『経営経理研究』第106号、2016年、169～207ページ。

Kazuo Usui, *The Development of Marketing Management: The Case of the USA c.1910-1940*, Aldershot, UK: Ashgate, 2008.

Kazuo Usui, *Marketing and Consumption in Modern Japan*, Abington, UK: Routledge, 2014.

Kazuo Usui, "Precedents for the 4Ps idea in the USA: 1910s- 1940s", *European Business Review*, Vol. 23, Issue 2, 2011, pp.136-153.

授業概要

最終年度において、次のように研究指導を行う。

- ①学会発表時の質疑応答の内容を吟味し、不足する文献資料を補強すると同時に、問題点を解決させる。
- ②博士論文を期限まで確実に完成させるために、年間、月間、週間の綿密な予定表を作成し、予定内容の完成度をチェックする。
- ③年度前半に論文の第二次稿を提出させる。
- ④年末に論文の内容、形式などを細部まで確認・修正し、論文を完成させる。

授業計画

<春期>		<秋期>	
第1回	学会発表の結果の検討	第1回	第二次稿の修正箇所の再確認
第2回	同上	第2回	同上
第3回	第二次稿作成のための報告	第3回	第三次稿の作成
第4回	同上	第4回	同上
第5回	同上	第5回	中間報告会の準備
第6回	同上	第6回	同上
第7回	中間報告会の準備	第7回	第三次稿のとりまとめ
第8回	同上	第8回	同上
第9回	第二次稿作成のための修正	第9回	同上
第10回	同上	第10回	最終稿のとりまとめ
第11回	同上	第11回	同上
第12回	同上	第12回	同上
第13回	同上	第13回	博士論文の完成・提出
第14回	論文構成、各章タイトルの適切性の再確認	第14回	最終試験の準備
第15回	第二次稿の完成	第15回	同上

到達目標

- ①所定の期限内に博士論文を完成すること
- ②独創性豊かな自立した研究者の養成

履修上の注意

論文の問題点の発見と解決を意欲的に取り組む姿勢を求めたい。

評価方法

博士論文の完成度と研究者としての自立性

テキスト

必要に応じて指示する。

授業概要

博士論文の執筆と報告を中心に指導を行う。

論文のテーマ・構成・各章の内容について再検討し、最終的な論文を作成する。

授業計画

<春期>		<秋期>	
第1回	論文のテーマ・方向性・進度・今後の予定を確認	第1回	各章の執筆と報告
第2回	研究テーマの再検討	第2回	各章の執筆と報告
第3回	研究テーマの再検討	第3回	各章の執筆と報告
第4回	研究テーマの確定	第4回	各章の執筆と報告
第5回	論文構成の再検討	第5回	各章の執筆と報告
第6回	論文構成の再検討	第6回	論文発表
第7回	論文構成の確定	第7回	各章の執筆と報告
第8回	各章の執筆と報告	第8回	各章の執筆と報告
第9回	各章の執筆と報告	第9回	各章の執筆と報告
第10回	各章の執筆と報告	第10回	各章の執筆と報告
第11回	各章の執筆と報告	第11回	各章の執筆と報告
第12回	各章の執筆と報告	第12回	完成論文の提出
第13回	各章の執筆と報告	第13回	完成論文の発表
第14回	各章の執筆と報告	第14回	完成論文の最終修正
第15回	論文発表	第15回	最終試験の準備

到達目標

博士論文の完成あるいは完成に向けた準備を行う。

履修上の注意

論文の執筆と報告を徹底して行う。

評価方法

論文の完成度と研究姿勢

テキスト

適宜指示する

授業概要

基本的に 1 対 1 での個別指導を行う。ただし、履修生が複数の場合、必要に応じてゼミナール形式で行うこともある。第 3 年次前半は、「①論文全体の大きな論理につき、骨折れ(論理の欠陥)がないか」、「②(追加的な文献の読み込み等により)補強の必要な箇所の改善」を図る。第 3 年次後半は、中間報告会への対応及び論文の細部の詰めまでを含め、最後の修正の期間とする。

授業計画

＜前期＞		＜後期＞	
第 1 回	論文全体のチェック①	第 1 回	論文全体のチェック①
第 2 回	論文全体のチェック②	第 2 回	論文全体のチェック②
第 3 回	追加文献による補強①	第 3 回	論文全体のチェック③
第 4 回	論文全体のチェック③	第 4 回	論文全体のチェック④
第 5 回	論文全体のチェック④	第 5 回	論文全体のチェック⑤
第 6 回	追加文献による補強②	第 6 回	論文全体のチェック⑥
第 7 回	論文全体のチェック⑤	第 7 回	論文全体のチェック⑦
第 8 回	論文全体のチェック⑥	第 8 回	論文全体のチェック⑧
第 9 回	追加文献による補強③	第 9 回	論文全体のチェック⑨
第 10 回	論文全体のチェック⑦	第 10 回	論文全体のチェック⑩
第 11 回	論文全体のチェック⑧	第 11 回	論文全体のチェック⑪
第 12 回	追加文献による補強④	第 12 回	論文全体のチェック⑫
第 13 回	論文全体のチェック⑨	第 13 回	論文全体のチェック⑬(最終試験準備)
第 14 回	論文全体のチェック⑩	第 14 回	論文全体のチェック⑭(最終試験準備)
第 15 回	追加文献による補強⑤	第 15 回	論文全体のチェック⑮(最終試験準備)

到達目標

仮に、博士論文が合計 3 つの部からなる場合、すでに論文中身の第 3 部まで全て一応執筆し終わっていることを前提とすると、第 3 年次の春期に実施することは、「①柱となる論理展開に瑕疵がないこと」、「②追加的な文献の読み込み等により補強の必要な箇所の改善を図ること」を主として実施する。第 3 年次後半は、論文の細部の詰めまでを含め、最後の修正の期間である。すなわち、(文章と文章との間、段落と段落の間をつなぐ)細かい論理展開が明確か、用いた用語・表現に不適切な箇所がないか、主語述語は一文に一つのみの組み合わせとなっているか、一つ文章の文字数が多すぎることはないか、接続詞を用いた明快な論理展開が実現されているか、助詞の用法に間違いがないか、引用のルールが守られているか、脚注のルールと充実度は妥当か、参考資料の書き方に問題はないか、等注意が必要がある。なお、第 3 年次は、中間報告会への対応及び論文コメントへの対応(論文の修正)が、可否を左右する重要事項である。

履修上の注意

授業の度に、毎回報告する。報告に当たっては、特別研究指導Ⅲを修了するまでは、四点セット(説明・質問等メモ、要旨、本文、論理展開図)を事前に提出する。特に、中間報告会等の発表会がある場合はその前に、発表内容の完成度を特に上げた内容で報告をすることが望まれる。なお、論文のどの箇所を執筆する場合であっても、①今書いているこの箇所の全体の中の位置付けは何か、それは明確か、②次に書くこととの論理的な繋がりがどうか、それは適切か、③今書いたことの根拠を述べたか、述べたならその根拠の提示は具体的かつ明確で十分な提示となっているか、④今書いたことの意味は何か、その意味は論文の中で必要性はどの程度なのか、等に留意して、記述を進めることが、(特に、第 3 年次は、細部のチェックをして完成させる最後の時期であるので)、大切である。

評価方法

基本的に、研究の進捗と深度(発表内容の質の高さを含む)に対して 100%配分で評価する。

テキスト

必要に応じて指示する。なお、参考書は、基本的に、金子宏著「租税法(第 24 版)」(弘文堂、2021 年)とする。

授業概要

2年次に発表した学術論文を踏まえ、博士論文のテーマと論点を再確認すると共に、先行研究の再確認の下での整理を行い、オリジナリティのある論文の作成ができるように指導する。

また、この博士論文の作成を通じて得た知見を活かした更なる研究に踏み出すことができるように指導する。

授業計画

＜春期＞		＜秋期＞	
第1回	博士論文のテーマと論点の再確認	第1回	論文の構成と報告
第2回	論文の研究手法の再確認	第2回	同上
第3回	先行研究の再確認と補強	第3回	同上
第4回	文献報告	第4回	同上
第5回	同上	第5回	同上
第6回	同上	第6回	中間報告会の資料作成
第7回	中間報告会の資料作成	第7回	同上
第8回	中間報告会の資料作成	第8回	論文の作成と報告
第9回	博士論文の構成の確定	第9回	同上
第10回	論文作成と報告	第10回	同上
第11回	同上	第11回	同上
第12回	同上	第12回	博士論文の提出
第13回	同上	第13回	残された課題の整理
第14回	同上	第14回	最終試験の準備
第15回	研究のまとめ	第15回	最終試験の準備

到達目標

- ・論理的な思考能力の充実と、独自性と新規性を備えている論文を作成するだけでなく、次なる研究に広がるような研究能力を身に付けることを目標とします。

履修上の注意

- ・論文作成の指導に頼ることなく、自主的な研究の取り組みによる研鑽を積み重ねるという姿勢が求められます。

評価方法

- ・博士論文作成に至るまでの研究者としての研究姿勢を評価します。

テキスト

- ・研究テーマに即して、適宜指示します。

授業概要

博士論文の完成、提出のために以下を指導する。

- ① 二年次に作成した博士論文草稿（第一次稿）を基礎にした草稿（第二次稿）を春期に提出させる。
- ② 論文作成のタイムスケジュール管理を厳格に行い、期限内の完成を指導する。
- ③ 関連学会のレベルを満たす博士論文の完成を指導する。

授業計画

＜春期＞		＜秋期＞	
第1回	博士論文のテーマの確認	第1回	博士論文の作成・報告
第2回	論文の研究手法、論点の再確認	第2回	博士論文の作成・報告
第3回	先行研究、必要文献の見直し	第3回	博士論文の作成・報告
第4回	研究報告・討論	第4回	博士論文の作成・報告
第5回	研究報告・討論	第5回	博士論文の作成・報告
第6回	研究報告・討論	第6回	中間報告会資料作成
第7回	中間報告会の資料作成	第7回	中間報告会資料作成
第8回	中間報告会の資料作成	第8回	博士論文の作成・報告
第9回	博士論文の構成（目次）の確定	第9回	博士論文の作成・報告
第10回	博士論文の作成・報告	第10回	博士論文の作成・報告
第11回	博士論文の作成・報告	第11回	博士論文の作成・報告
第12回	博士論文の作成・報告	第12回	残された課題の整理
第13回	博士論文の作成・報告	第13回	論文の提出
第14回	博士論文の作成・報告	第14回	最終試験準備
第15回	博士論文草稿（第2次稿）提出	第15回	最終試験準備

到達目標

3年次春期に博士論文草稿（第2次稿）を提出。
学術上での意義がある博士論文を完成する

履修上の注意

論文作成のタイムスケジュール管理を厳格に行い、余裕をもって期限内に論文を完成し提出すること。

評価方法

博士論文の完成と研究者としての姿勢。

テキスト

研究テーマに即して適宜指示する。